

財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書第103集

中島遺跡(1952-2地点)

—IC周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

横芝光町

財団法人 山武郡市文化財センター

中島遺跡(1952-2地点)

—IC周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



序 文

財団法人山武郡市文化財センターは、山武郡内における埋蔵文化財の調査研究、地域住民の文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和59年に設置され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、山武郡市文化財センター発掘調査報告書第103集として、IC周辺整備事業に伴って実施した、中島遺跡（1952-2地点）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査では、縄文時代や奈良・平安時代の遺構・遺物が幅広く出土しました。特に奈良・平安時代における大規模な畠跡の検出は、近接する芝崎遺跡と共に県内はもとより南関東を代表する発見例となり、奈良・平安時代の空間利用のあり方や農業の実体を明らかにする上で貴重な成果を得ることができました。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財保護活動の一環として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し、ご指導、ご協力をいただきました横芝光町、千葉県教育庁教育振興部文化財課、横芝光町教育委員会をはじめ、関係機関並びに関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人山武郡市文化財センター

理事長 石井利夫



中島遺跡全景（南西→）



中島遺跡全景（垂直1）



中島遺跡全景（垂直2）



中島遺跡全景（垂直3）

例　　言

1. 本書は、横芝光町によるIC周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書に所収される内容は、千葉県山武郡横芝光町大字芝崎字中島1952-2番地ほかに所在する、中島遺跡（1952-2地点）の発掘調査の成果である。
3. 本遺跡は、過去2回にわたり発掘調査が実施されており、過去の調査地点との混同を避けるため上記のごとく番地を入れることによって、今回の発掘調査地点を明確にした。
4. 本書で使用した座標及びグリッドは、隣接地で財団法人東総文化財センターが発掘調査を実施した時の呼称を使用した。
5. 発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、横芝光町の委託に基づき、千葉県教育庁教育振興部文化財課及び横芝光町教育委員会の指導のもと 財団法人山武郡文化財センターが次のとおり実施した。

本調査期間 平成18年10月10日～平成18年12月14日

整理作業期間 平成19年10月1日～平成20年3月7日

6. 本遺跡では、千葉県教育庁教育振興部文化財課及び横芝光町教育委員会の指導により、東西の隣接部分で本調査が行われているため、確認調査を省略し本調査からの実施となった。本調査は調査課長島立桂の指導のもと、調査研究員田中万里子が担当し、整理・報告書作成は、調査課長大谷弘幸が行った。
7. 出土遺物、図面等の記録類は、財団法人山武郡文化財センターが保管している。
8. 本書第1図に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『多古』『八日市場』『成東』『木戸』の一部に加筆したものを使用した。
9. 本書図版1に使用したものは京葉測量株式会社の提供によるものを使用した（昭和59年1月撮影）。
10. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏からご指導・ご協力を賜った。ここに記して謝意を表します。

千葉県教育庁教育振興部文化財課、横芝光町教育委員会、横芝光町、天野 努、稻見英輔

凡　　例

1. 本書で用いた遺構配置図は、公共座標を基準として作成し、方位は全て座標北を示す。
2. 遺構番号は調査時のものを用い、遺構挿図中の水系レベルの数値は、標高値を示す。
3. 計測値の（ ）内は推定数値を、（ ）内は残存数値を示す。

本文目次

序文

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と歴史的環境	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	1
第3節 調査の方法.....	4
第2章 検出された遺構と遺物.....	7
第1節 縄文時代.....	7
第2節 奈良・平安時代以降.....	9
1. 土坑.....	9
2. 崩跡.....	17
3. 溝.....	28
4. グリッド出土遺物.....	28
第3章 まとめ.....	30

挿図目次

第1図 中島遺跡と周辺の遺跡	第12図 崩跡1 遺構実測図
第2図 中島遺跡周辺の地形図	第13図 崩跡2 遺構実測図
第3図 調査区グリッド呼称概念図	第14図 崩跡3 遺構実測図
第4図 基本土層図	第15図 崩跡4 遺構実測図
第5図 中島遺跡遺構全測図	第16図 崩跡5 遺構実測図
第6図 縄文土器実測図	第17図 崩跡6 遺構実測図
第7図 遺構全測図	第18図 崩跡7 遺構実測図
第8図 土坑実測図	第19図 崩跡出土遺物実測図
第9図 D-004遺構・遺物実測図	第20図 M-003遺構・遺物実測図
第10図 D-005遺構・遺物実測図	第21図 グリッド出土遺物実測図
第11図 D-006遺構・遺物実測図	

表 目 次

第1表 遺物観察表

第2表 島跡新旧関係表

図版目次

卷頭図版 1 中島遺跡全景（南西→）	図版 4 D-005遺物出土状況
中島遺跡全景（垂直1）	D-005
卷頭図版 2 中島遺跡全景（垂直2）	D-006
中島遺跡全景（垂直3）	図版 5 ピット列
図版 1 中島遺跡周辺空中写真	U-024・030・032周辺
図版 2 空撮（東側）	U-057・069・070周辺
D-001	図版 6 出土遺物（縄文土器・土製品・石製品・錢貨）
D-002	図版 7 出土遺物（D-004～D-005）
図版 3 D-003	図版 8 出土遺物（D-005～島）
D-004遺物出土状況	図版 9 出土遺物（M-003～グリッド・墨書）
D-004	

第1章 調査に至る経緯と歴史的環境

第1節 発掘調査に至る経緯

光町では、千葉県匝瑳郡光町芝崎字中島1952-2他に、IC周辺整備事業を計画し、光町教育委員会教育長に対し、平成17年9月28日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて（照会）」が提出された。

光町教育委員会は、照会地に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨の回答を平成17年10月11日付けで行った。これに基づいて横芝光町教育委員会、横芝光町（平成18年合併により横芝光町となる）との二者で協議が重ねられた結果、当該地域について発掘調査を実施することになった。なお、当該地域の東西隣接地において、すでに本調査が実施され多数の遺構が検出されていることから、当該地域においても同様遺構の検出が予想された。このため確認調査は実施せずに本調査のみ行うこととなった。

発掘調査は、横芝光町教育委員会の指導のもと、財団法人山武都市文化財センターが実施することとなり、横芝光町と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結した。

本調査は1,416m²を対象として、平成18年10月10日に開始し、平成18年12月14日に終了した。

第2節 遺跡の位置と環境

中島遺跡（1952-2地点）は、千葉県山武郡横芝光町芝崎字中島1952-2他に所在している。

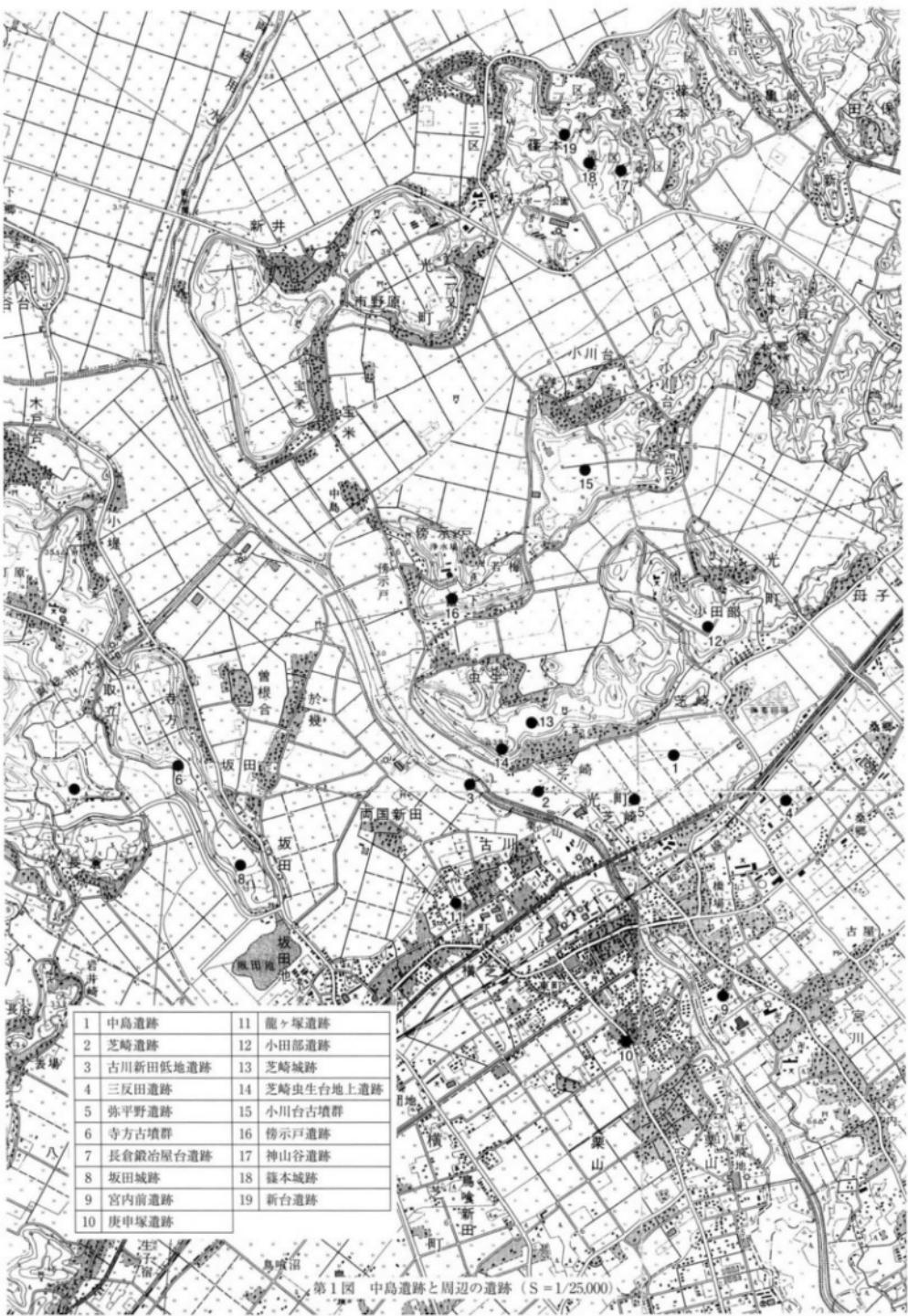
本遺跡の所在する横芝光町は千葉県の北東部で、山武郡最北端に位置し、町域は東西約5km、南北約14km、面積は67km²を測り、人口約27,000人、世帯数は約9,200戸（平成19年4月現在）を擁する。

横芝光町は北を匝瑳市、南を山武市、西を芝山町・多古町にそれぞれ接している。町域の中心部を栗山川が北西-南東方向に流下し、北西部には下総台地に属する森林・畑地帯が、東部には九十九里平野の水田地帯が広がっている。また、北西部の台地は栗山川およびその支流による浸食を受け、幾筋もの谷が複雑に入り組んでいる。近年、銚子連絡道路や周辺の道路整備が進められ、成田空港に近い立地条件から更なる発展が予想される。

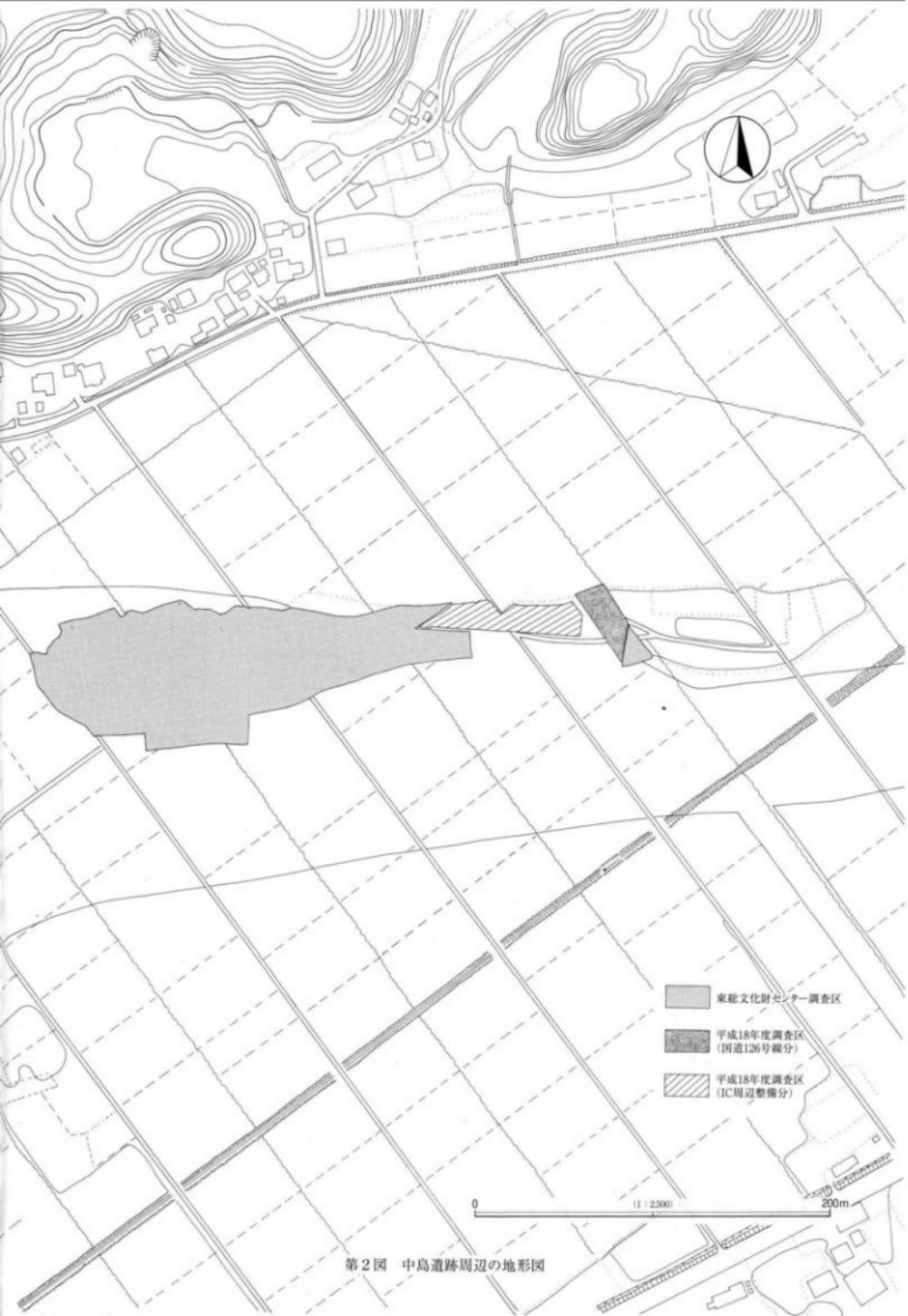
中島遺跡（1952-2地点）は栗山川が九十九里平野へと抜ける、栗山川左岸の砂带上に立地している。遺跡の所在する砂帶は東西500m、南北60mの細長い形状を呈しており、周囲を水田によって取り囲まれ、特に島のような景観を示している。この砂帶は九十九里平野に形成された砂丘列の再奥部に位置し、その形成最も古いものと考えられる。標高は45m前後である。

中島遺跡ではこれまでに、財団法人東総文化財センターと当文化財センターが調査を実施している。平成13年2月～平成17年3月まで財団法人東総文化財センターが8,500m²を対象に発掘調査を行い、奈良・平安時代の掘立柱建物群や中世の居館跡を検出し、平成18年1月～2月まで当文化財センターが590m²の調査を行い、奈良・平安時代の畠跡などを検出している。今回の調査面積1,416m²を加えると中島遺跡の総調査面積は10,506m²となり、中島遺跡全体の8割近くを調査したこととなる（第2図）。

本遺跡の周辺では、国道126号線山武東総道路関連事業において、中島遺跡と同様な低地部に立地する砂丘帶上の遺跡が調査されている。中島遺跡から1kmほど西に位置する芝崎遺跡（2）と古川新田低地遺跡（3）では、縄文時代後期加曾利B式を中心とする繩文土器と石器、奈良・平安時代の堅穴住居跡・掘立柱建物跡・畠跡、中世の掘立柱建物跡が検出されている。また、南西300mに所在する三反田遺跡（4）、弥平野遺跡（5）



第1図 中島遺跡と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)



第2図 中島遺跡周辺の地形図

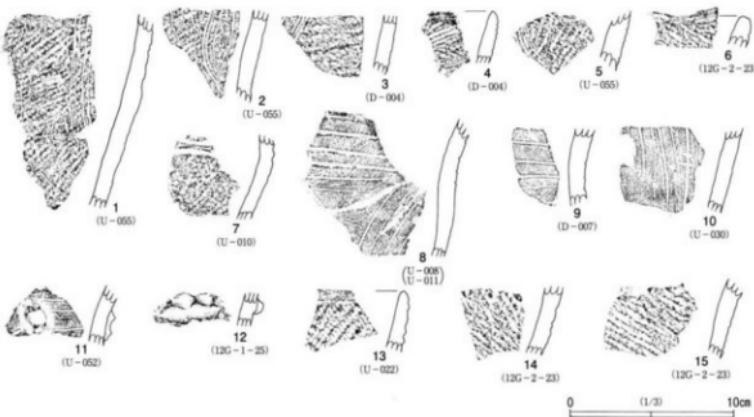


第2章 検出された遺構と遺物

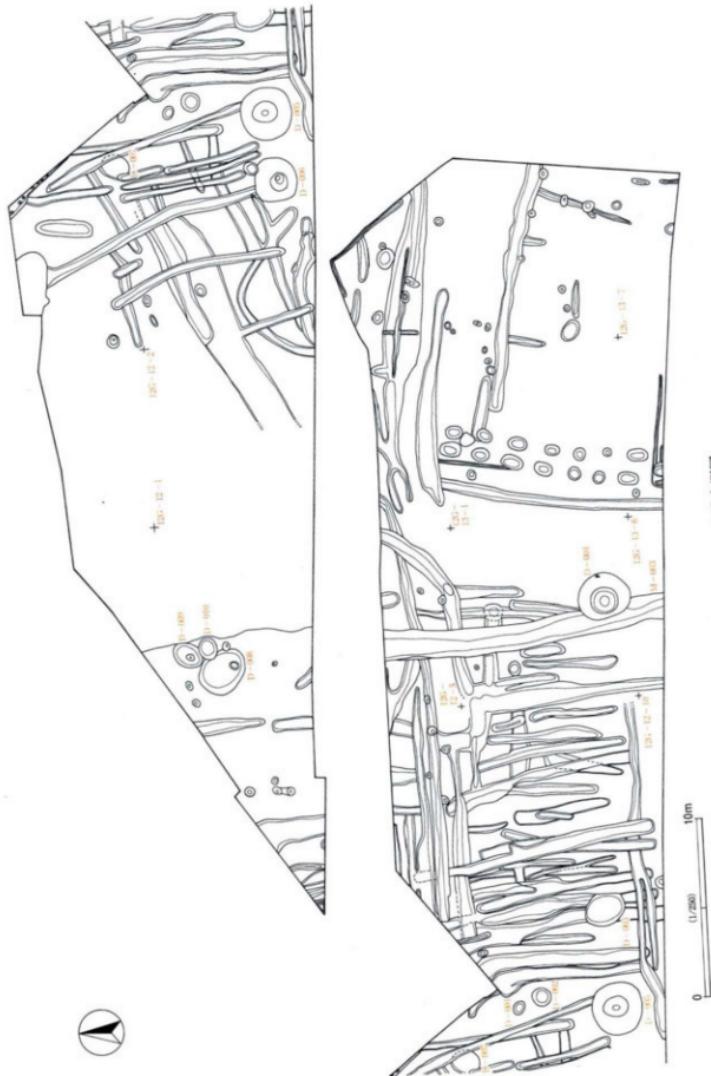
第1節 繩文時代

縄文時代の遺構は検出されなかったが、奈良・平安時代の遺構覆土中やグリッド内の遺物として縄文土器が約50点出土した。いずれも小破片で、全体の器形を復元できるものはなく、図示可能なものは15点にとどまった。出土位置は12G-12-3グリッドを中心とした遺構・グリッドからの出土が多かった。

出土した縄文土器は、すべて縄文時代後期の堀之内式から加曾利B式の範疇で捉えられるもので、器種は粗製の深鉢であった（第6図）。1から5は縄文を地文とした上に細い条線を施したものである。1と2は同一個体で単節LRの地文に5本単位の条線が上位から下位に向かって施されている。胎土には粗い白色砂粒子を多く含んでいる。なお、1は深鉢胴中位から下位の破片で外面下部にはスヌの付着が認められる。3と4も同一個体と思われる。縄文の地文の上に4～5本単位の条線が施されている。胎土には白色砂粒子を多く含んでいる。4は口縁部片で口唇端部はつまみ上げたように尖っている。5も縄文を地文として4本単位の条線を施している。6は波状をなす口縁の一部である。下部の破断面には粘土接合痕が明瞭に認められる。7は深鉢胴上位の破片で上部に2条の沈線が巡っている。8から10は沈線のみが施されているものである。8と9は深鉢胴上位の屈曲部の破片である。破片上位には横方向、下位には斜め方向の沈線が施されている。10は深鉢胴下位の破片で上から下に向かって数本の沈線がみられる。なお、いずれも胎土中に白色砂粒子と黒色砂粒子を多く含む。また、表面の摩耗も著しい。11は数本の沈線の上に縱方向の紐線文を伴う。12の地文は不明であるが、横方向の紐線文がみられる。深鉢胴上位の破片である。13から15は縄文のみが施されているものである。13は口縁部で口唇端部は丸みをもっている。14と15は同一個体であろう。15は胴中位の、14は胴下位の破片である。



第6図 縄文土器実測図



第7回 遺構全測図

第2節 奈良・平安時代以降

奈良・平安時代以降の検出遺構は、土坑10基、畠跡7か所、溝10条、ピット列1条である。なお、溝については規模・形態から、調査時点において溝と畠状遺構を分けて遺構番号を付けたが、畠跡に伴う可能性が高い溝とピット列は畠跡と一括して記述することとした。また、遺構番号については混乱を避けるために調査時に使用したものをそのまま用いた。遺物では古墳時代から近世に至るまで様々なものが出土しているが、弥生土器の出土は認められなかった。また、遺物としては古墳時代のものが出土しているが、遺構は確認されなかった。

1. 土坑

土坑は10基検出され、平面形態はすべて円形を呈するものであった。断面形態をみると浅い皿状を呈するもの（D-001, 002, 003, 007, 008, 009, 010）と漏斗状をなすもの（D-004, 005, 006）に大別することができる。検出位置としては、断面が漏斗状をなすものは砂丘帯南縁辺部の低地部分に近いところから列をなして検出されるのに対して、皿状をなすものは砂丘帯中央部の比較的標高が高い部分から検出されており、両者の間に機能的な違いがあったことを示している。

D-001（第8図、図版2）

位置：12G-12-3

重複関係：単独

主軸方向：N-60°-W

規模と平面形：0.76m×0.64mの円形である。深さは不明である。

壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形と想定される。

覆土：暗褐色土

遺物：なし

所見：本跡は浅く遺存状態も不良であり、覆土の堆積状況も不明である。土坑の性格も判然としない。近接するD-002と形態等も似ていることから、同時期・同性格のものであろうか。

D-002（第8図、図版2）

位置：12G-12-3

重複関係：単独

主軸方向：N-6°-W

規模と平面形：1.08m×1.00mの円形である。深さは不明である。

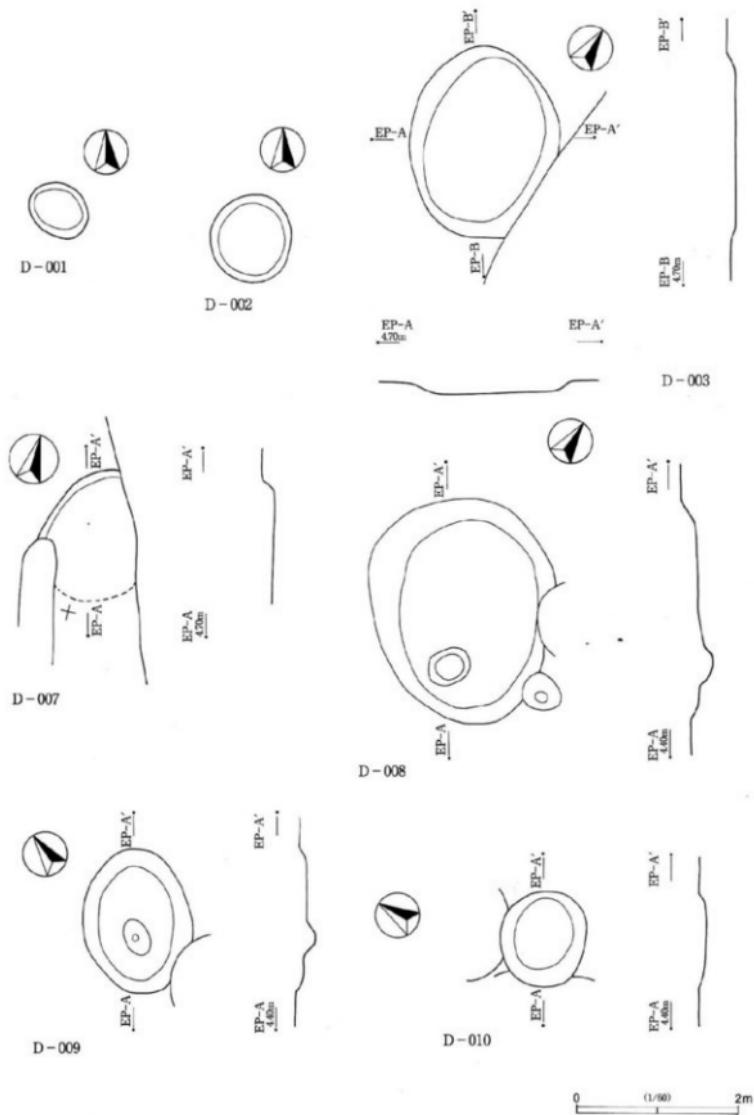
壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形と想定される。

覆土：暗褐色土

遺物：なし

所見：本跡は浅く遺存状態も不良であり、覆土の堆積状況も不明である。土坑の性格も判然としない。近接するD-001と形態等も似ていることから、同時期・同性格のものであろうか。



第8図 土坑実測図

D - 0 0 3 (第8図、図版3)

位置: 12G-12-3

重複関係: U-005, U-006よりも新しい

主軸方向: N-25°-W

規模と平面形: 2.34m × 1.84m の楕円形である。深さは10cmである。

壁: 外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面: 盆状に窪んだ円形である。

覆土: 暗褐色土

遺物: なし

所見: U-006は墓跡2に属し、U-005は墓跡3に属している帆状遺構である。本土坑はこれらよりも新し

いものであると考えられる。詳細な時期や性格については不明である。

D - 0 0 4 (第9図、第1表、図版3)

位置: 12G-12-5

重複関係: U-039よりも新しく、M-003よりも古い

主軸方向: N-25°-W

規模と平面形: 2.92m × 2.52m の楕円形である。深さは78cmである。

壁: 外傾しながら大きく立ち上がる。

底面: 漏斗状に窪んだ円形である。

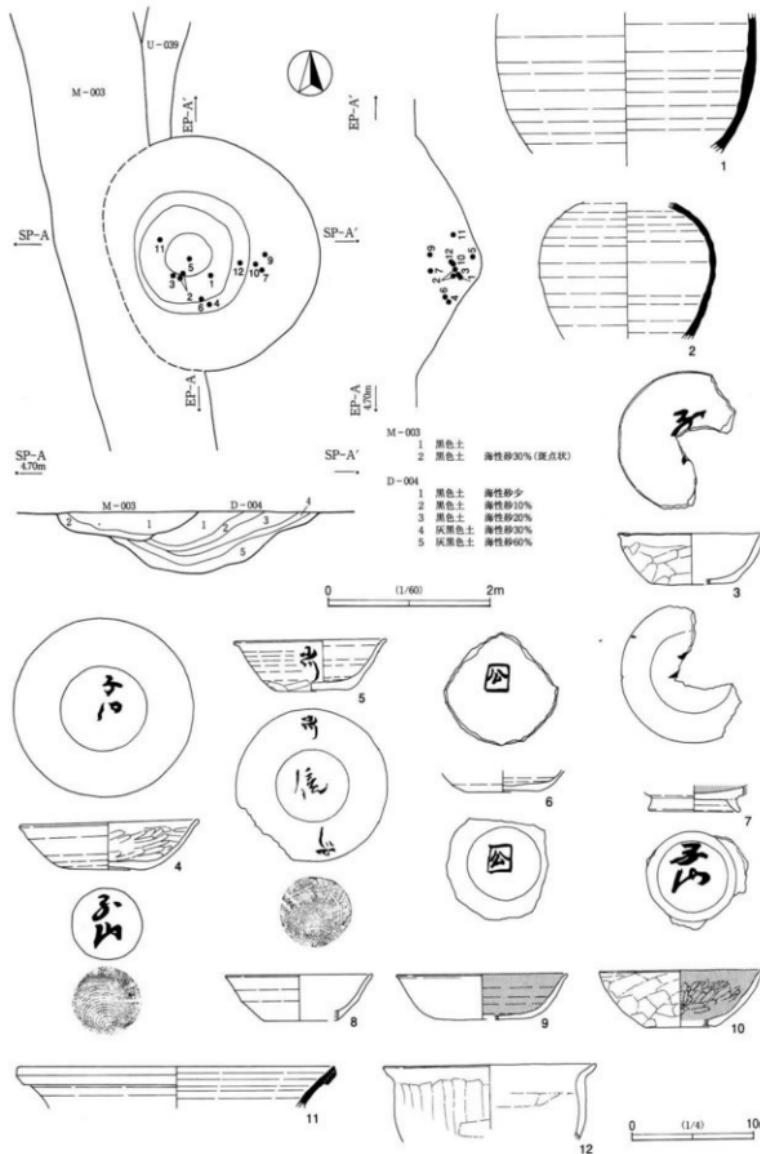
覆土: 上層部は黒色土、下層部は灰黑色土からなり、堆積状況はレンズ状を呈している。

遺物: 遺構中心部分の覆土中層から下層にかけてまとめて出土した。

1と2は灰釉陶器の長頸壺である。2の肩部から胴上位にかけて灰釉が施されている。3から10までは土器器坏である。3の底部内面には「子□」の墨書があり、底部外面にも墨痕が認められる。これらはほかの遺物との関連から「子山」と書かれていたものと考えられる。また、底部中央が欠失し、破断面が磨滅していることから打ち欠き行為が行われていた可能性がある。4の底部内外面にも「子山」の墨書がある。口縁部の両端に打ち欠きがあり、破断面は磨滅している。5では胴部外面2か所に「小川」の墨書が、底部外面に「億」と思われる文字が書かれている。6の底部内外面には「公」の文字を四角で囲ったものがみられる。7の底部外面にも「子山」の墨書がある。本跡から出土した墨書土器では「子山」が最も多いが、以前行った調査においても「子山」墨書が出土しており、今回のものを含め中島遺跡から合計4点の「子山」墨書土器が出土したことになる。また、これらは筆使いから同一人物によって書かれた可能性が高い。このほか7は高台付の坏で、7・9・10には内面に黒色処理が施されている。11は須恵器壺口縁部で、12は小型の土器器壺である。本跡で出土した遺物は遺構覆土中層から下層にかけてまとめて出土したもので、一括して投棄されたものといえる。同一筆致の墨書の存在や打ち欠き痕跡の存在から、何らかの行為が行われた後まとめて投棄された可能性が高い。

所見: 遺構の検出位置が砂丘帯縁辺部の低地部に近いところであること、断面形態が漏斗状をなすことから、

本跡は井戸であった可能性が高い。出土遺物に墨書土器や口縁部・底部打ち欠き土器などがまとめて出土したことも注目される。遺構の時期は概ね9世紀後半と推定される。なお、本跡よりも古いU-039は墓跡2に属し、本跡より新しいM-003は中世の所産と考えられる。



第9図 D-004遺構・遺物実測図

D-005 (第10図, 第1表, 図版4)

位置: 12G-12-3

重複関係: U-051よりも古い

主軸方向: N-1°-W

規模と平面形: 2.96m × 2.82m の円形である。深さは94cmである。

壁: 外傾しながら大きく立ち上がる。

底面: 漏斗状に窪んだ円形である。

覆土: 黒褐色土からなり、堆積状況はレンズ状を呈している。

遺物: 覆土内から散在して出土した。

1から14は壺である。このうち4と5は酸化焰焼成の須恵器であろうか。13と14は黒色処理が施されている。5の壺底部外面には「厲片□」の墨書と焼成後線刻で「×」が書かれている。なお、墨書と線刻との関係は、重なり合う部分がないため不明である。10には胴部外面に「中」と思われる墨書文字があり、12の胴部外面には「天」の焼成後線刻がみられる。「×」「天」の文字・記号は前回調査でも出土しており、「×」で合計9点、「天」で合計6点（畠跡3出土資料含む）の出土となった。15から19までは土師器甕である。15と17にはスヌの付着が認められる。本跡の遺物出土傾向は、D-004とは異なり散在した状態での出土であった。また、遺物の年代についても若干の時間幅が認められ、遺構廃絶後土砂の堆積過程で遺物が投げ捨てられたものと考えられる。

所見: 遺構の検出位置が砂丘帯縁辺部の低地部に近いところであること、断面形態が漏斗状をなすことから、本跡は井戸であった可能性が高い。遺物の出土傾向をみると下層から8世紀後半のものが、上層から9世紀前半の資料が出土しており、本跡が8世紀後半から9世紀前半にかけて埋没したこと示している。

なお、本跡よりも新しいU-051は畠跡3に属している。

D-006 (第11図, 第1表, 図版4)

位置: 12G-12-2

重複関係: U-057よりも古い

主軸方向: N-0°

規模と平面形: 2.45m × 2.32m の円形である。深さは88cmである。

壁: 外傾しながら大きく立ち上がる。

底面: 漏斗状に窪んだ円形で、中央部分が30cmほどピット状に一段深くなっている。

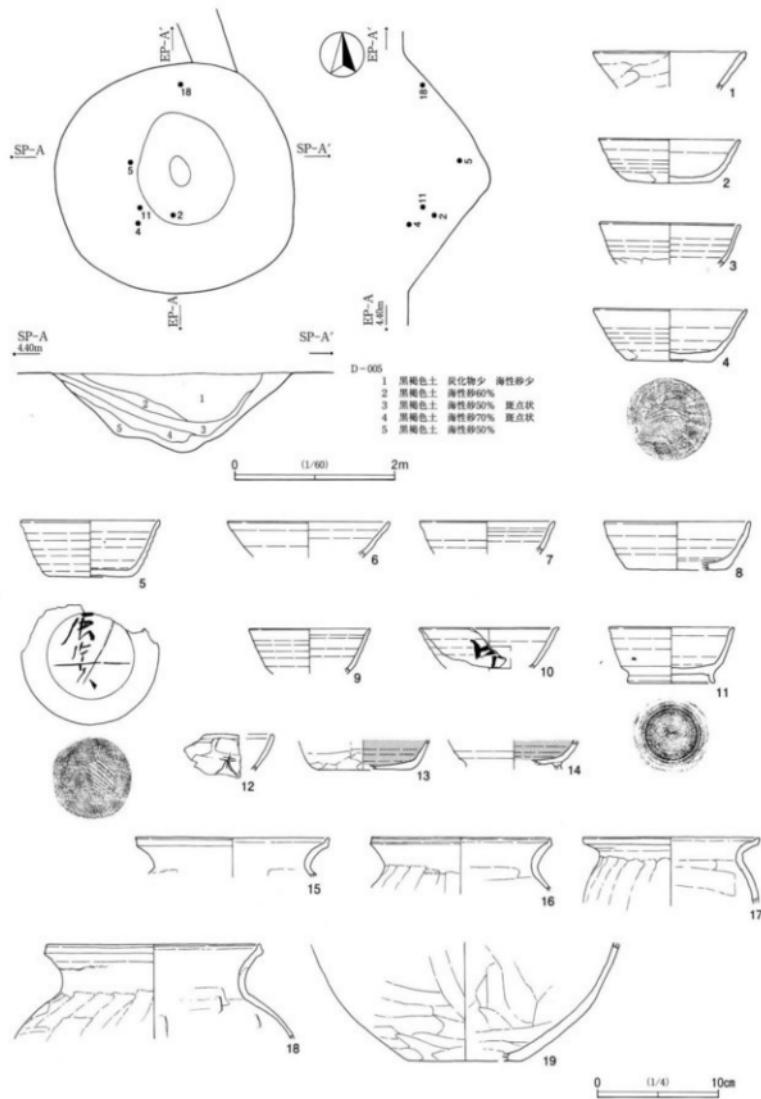
覆土: 黒褐色土からなり、下層部はやや黄色味がかっている。堆積状況はレンズ状を呈している。

遺物: 覆土内から散在して出土した。

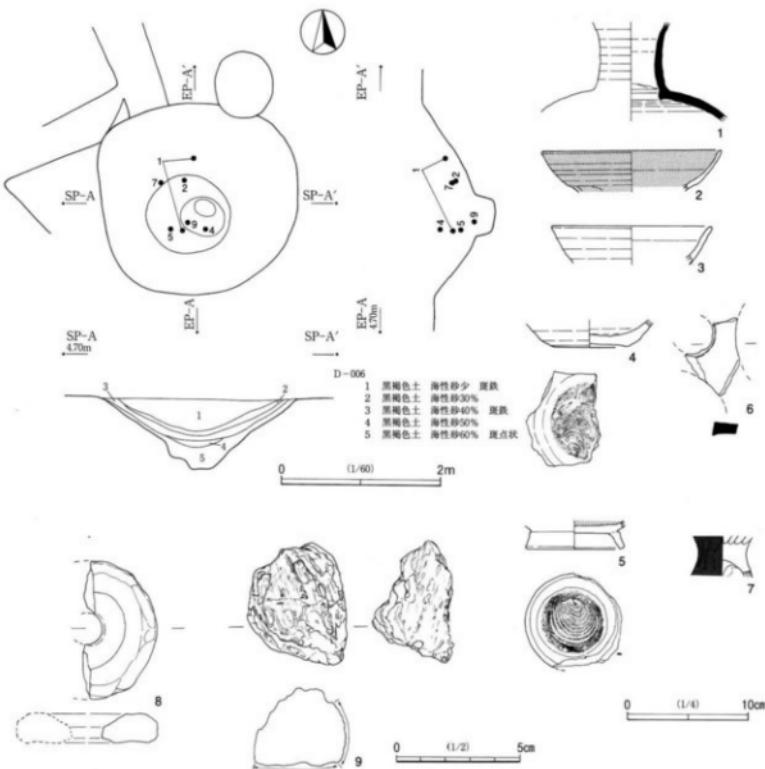
1は灰釉陶器長頸壺である。頸部から肩部にかけて灰釉が施されている。2から5は土師器壺である。このうち2と5には黒色処理が施されている。また、5は高台付である。6は須恵器瓶の底部である。7は古墳時代前期の土師器高壺の脚部で、外面が赤彩されている。8は土製の紡錘車で、土器等の転用ではなく当初より紡錘車として製作されたものである。なお、軸受け部が表裏両側とも摩滅している。9は輕石で2か所で摩耗痕が認められる。本跡から出土した遺物は遺存率の低いものが多く、出土状況も散在的である。このことから、これらは遺構埋没過程で混入したものと考えられる。

所見: 遺構の検出位置が砂丘帯縁辺部の低地部に近いところであること、断面形態が漏斗状をなすことから、

本跡は井戸であった可能性が高い。詳細な時期がわかる資料は少ないが、概ね9世紀後半の遺構であろ



第10図 D-005遺構・遺物実測図



第11図 D-006遺構・遺物実測図

う。なお、本跡よりも新しいU-057は島跡3に属している。

D-007 (第8図)

位置：12G-2-22, 12G-2-23

重複関係：U-051, U-079よりも古い

主軸方向：N-6°-E

規模と平面形：(1.84m) × (1.68m) の梢円形が推定される。深さは18cmである。

壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形である。

覆土：暗褐色土

遺物：土師器細片が僅かに出土したが、図示可能なものはなかった。

所見：U-051, U-079は墓跡3に属している畝状遺構である。本土坑はこれらよりも古いものであると考えられる。詳細な時期や性格については不明である。

D-008 (第8図)

位置：12G-11-5

重複関係：D-010と切り合うが新旧関係は不明

主軸方向：N-35°-W

規模と平面形：2.78m×2.38mの稍円形である。深さは18cmである。

壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形で、南側に深さ12cmの小ピットを伴う。

覆土：黄褐色土

遺物：なし

所見：詳細な時期や性格については不明である。

D-009 (第8図)

位置：12G-11-5

重複関係：D-010と切り合うが新旧関係は不明

主軸方向：N-27°-E

規模と平面形：1.80m×1.34mの稍円形である。深さは10cmである。

壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形で、中央やや南側に深さ10cmの小ピットを伴う。

覆土：黄褐色土

遺物：なし

所見：詳細な時期や性格については不明である。

D-010 (第8図)

位置：12G-11-5

重複関係：D-008, D-009と切り合うが新旧関係は不明

主軸方向：N-61°-E

規模と平面形：1.18m×1.02mの円形である。深さは10cmである。

壁：外傾しながら緩やかに立ち上がる。

底面：皿状に窪んだ円形である。

覆土：黄褐色土

遺物：なし

所見：詳細な時期や性格については不明である。

2. 畠跡

畠跡としたものには、畠状遺構79条、溝9条、ピット列1条を含んでいる。発掘調査段階では畠状遺構、溝、ピット列それぞれに遺構番号を付けて、単独の遺構として調査を実施した。ここでは、これら遺構の方向性や規模、新旧関係を参考に7か所の畠跡に再分類して記述することとした。なお、畠跡5は畠跡1から4の分類作業において帰属を明らかにできなかったもので、畠跡6と7は調査区の東寄りと西寄りの狭い範囲から検出されたものであったため、一括して図示・記述することとした。

畠跡1（第12図、第2表）

位置：12G-12-1～12G-12-4

構成遺構：U-017, 023, 054, 056, 065, 067, 072, 073, M-010

重複関係：U-023<U-020, 022, 026 / U-054<U-055 / U-056<U-052, 057, 068, 069, 070 /

U-065<U-057, 074 / U-067<U-068, 069, 070 / U-072<U-055, 071 /

M-010<U-055, 057 /

主軸方向：N-65°～90°-E

規模と平面形：長さ0.8m～15m、深さ10cm～12cmを測る。

遺物：なし

所見：本跡は、切り合い関係から畠跡2・3・4よりも古いものと考えられる。また、D-004よりも古い段階の畠跡2よりもさらに先行することから、D-004の年代である9世紀後半以前の所産と考えられる。なお、M-010は溝の方向性を共有しているものの、規模では幅が最大3mあることなどから、畠を区画する溝または通路であった可能性も考えられる。

畠跡2（第13・19図、第1・2表）

位置：12G-12-2～12G-12-5

構成遺構：U-001, 006, 007, 008, 009, 011, 013, 015, 018, 021, 022, 025, 028, 029, 031, 034, 037, 039, 040, 041, 042, 043, 052, 074, 075

重複関係：U-006<U-012, 024, D-003 / U-007<U-012 / U-008<U-012 / U-009<U-005 /

U-011<U-003 / U-013<U-024 / U-015<U-004 / U-018<U-024 /

U-021<U-019 / U-023<U-022<U-027 / U-031<U-032 / U-034<U-032, 036 /

U-037<U-032 / U-039<D-004, M-003 / U-040<M-004 / U-042<M-003, 004 /

U-056<U-052<U-051 / U-065<U-074 /

主軸方向：N-5°～0°-W

規模と平面形：長さ10m～8.5m、深さ10cm～18cmを測る。

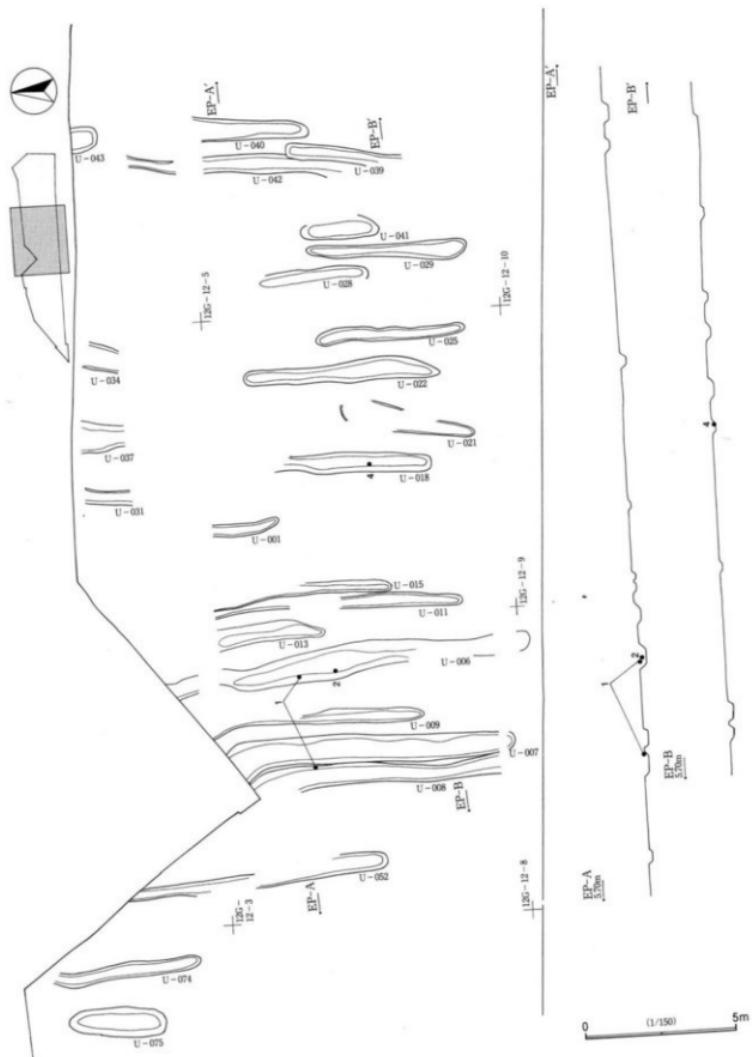
遺物：奈良・平安時代の土師器と須恵器が小破片ながら多量に出土している。図示可能なものは4点のみであった。1から3は土師器壊である。1は内面が黒色処理されている。また、底面は人為的に破損せられている。3の外面底部には墨痕が認められるが、文字等は判別できない。4は古墳時代の高杯脚部で、摩耗が著しい。

所見：本跡は、切り合い関係から畠跡1よりも新しく、畠3・4、D-003、004よりも古いものと考えられる。

D-004の年代である9世紀後半以前の所産と考えられる。



第12図 島路1 造構実測図



第13図 畠跡2遺構実測図

畠跡3（第14・19図、第1・2表）

位置：12G-12-2~12G-12-5

構成遺構：U-003, 004, 005, 010, 019, 020, 026, 027, 051, 053, 055, 057, 068, 069, 070, 071, 079

重複関係：U-011<U-003 / U-015<U-004<U-024, 030, 032, 033 /

U-009<U-005<U-012, 024, D-003 / U-010<U-012 / U-021<U-019 /

U-023<U-020 / U-023<U-026 / U-022<U-027 / D-005, 007, U-052<U-051 /

U-054, 072, M-008, 010<U-055 / U-056, 065, D-006, M-010<U-057 /

U-056, 067<U-068 / U-056, 067<U-069 / U-056, 067, 073<U-070 /

U-072<U-071 / D-007<U-079 /

主軸方向：N-10°~15°-W

規模と平面形：長さ2m~13.7m、深さ10cm~20cmを測る。

遺物：U-010を中心に、奈良・平安時代の土師器と須恵器が小破片ながら多く出土している。図示可能なものは9点であった。5から7は土師器壺である。6の外面胴部には墨書で「天」の文字が認められる。

8は蓋、9と10は土師器壺である。11は輕石で両側面が研磨され摩耗している。12と13は須恵器壺の破片を再利用した砥石である。12は先端部のみ使用してあり、13は全面を使用している。

所見：本跡は、切り合い関係から畠跡1・2、D-005, 006よりも新しく、高4、D-003よりも古いものと考えられる。D-006の年代である9世紀後半以降の所産と考えられる。

畠跡4（第15・19図、第1・2表）

位置：12G-12-3~12G-13-1

構成遺構：U-012, 024, 030, 032, 033, 035, 038

重複関係：U-005, 006, 007, 008, 010<U-012<U-014 / U-004, 005, 006, 013, 018<U-024 /

U-004<U-030<M-003, 004 / U-004, 031, 034, 037<U-032 / U-004<U-033 /

U-038<M-003 /

主軸方向：N-80°~90°-E

規模と平面形：長さ4.5m~24.3m、深さ18cm~30cmを測る。

遺物：奈良・平安時代の土師器と須恵器の小破片が若干出土している。図示可能なものは3点のみであった。

14は土師器壺で、15は土師器壺の口縁部である。16はU-030から出土した新寛永通宝当四銭である。
明和六（1769）年の初鑄である。

所見：本跡は、切り合い関係から畠跡1・2・3よりも新しく、M-003, 004よりも古いものと考えられる。

M-003は中世のものと考えられ、畠4は中世以前と推定される。なお、江戸期の錢貨が出土しているが、ほかに中世以降の遺物は認められず、混入品と考えるのが妥当であろう。

畠跡5（第16・19図、第1・2表）

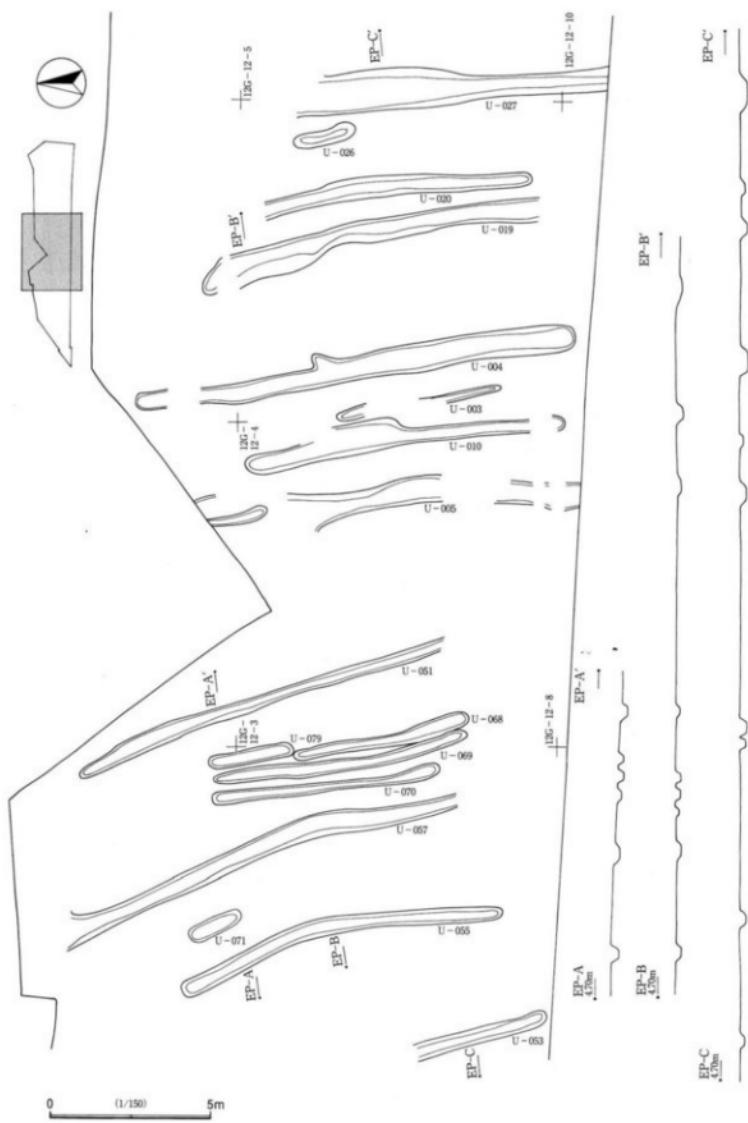
位置：12G-12-1~12G-12-5

構成遺構：U-002, 014, 016, 036, M-004, 007, 008

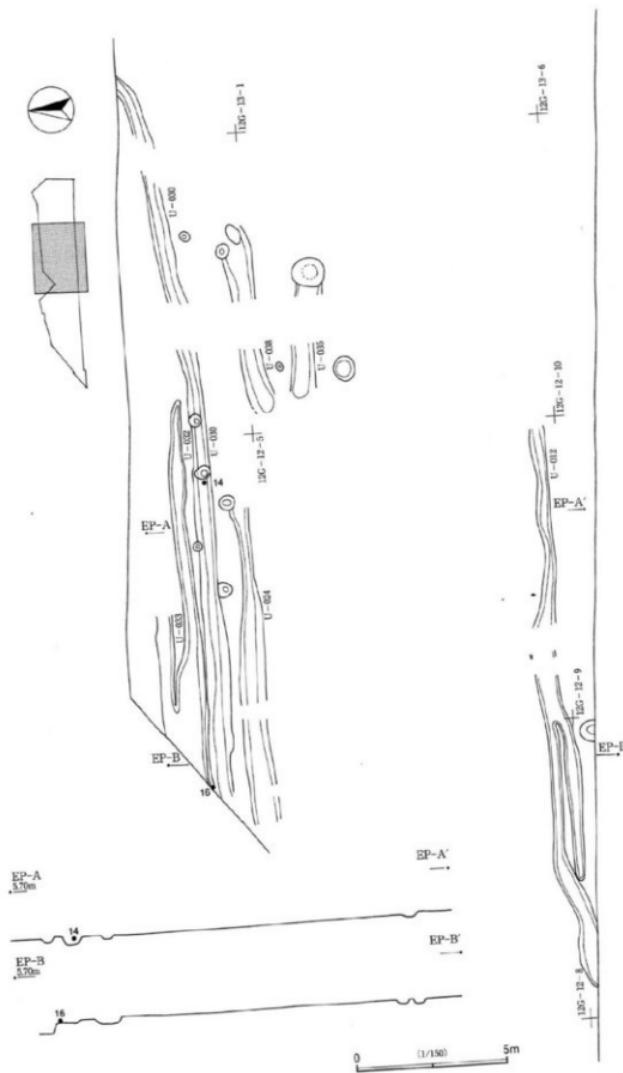
重複関係：U-016<U-002 / U-012<U-014 / U-034<U-036 / U-030, 040, 042<M-004 /

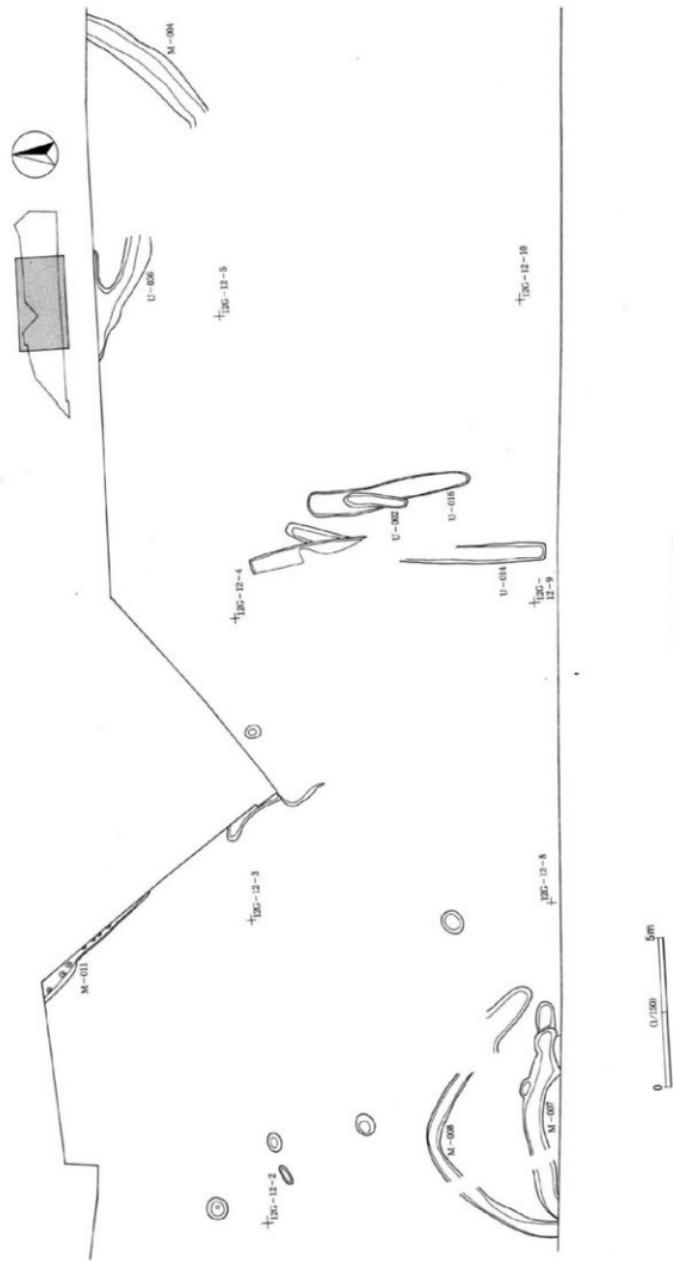
M-008<U-055

規模と平面形：長さ2.0m~10.0mを測る。



第14図 畠跡3遺構実測図





第16圖 嵩眞5重構架測圓

遺物：出土遺物はすべて奈良・平安時代の土師器と須恵器の小破片であった。図示可能なものは2点のみであった。図示したものはいずれもU-036から出土したもので、土師器壊である。

所見：畠跡5は畠跡1～4の分別作業において、帰属を明らかにできなかったものを集めた。形態的にもM-008のように大きく湾曲するものもあり、畠跡と断定できないものも含まれる。

畠跡6（第17・19図、第1・2表）

位置：12G-13-1～12G-13-2

構成遺構：U-044, 045, 046, 047, 048, 049, 050, 058, 059, 060, 066, M-001, 002, 005, 006

重複関係：U-044, 045<M-002 / U-048<M-005 / U-066<M-006

主軸方向：N-8°～20°-E, N-80°-W

規模と平面形：長さ2.0m～18.5m, 深さ10cm～18cmを測る。

遺物：出土遺物は奈良・平安時代の土師器と須恵器の小破片が主体を占めているが、M-001, 005, 006からは瀬戸・美濃系の陶器片も出土している。図示可能なものは2点のみで、いずれもM-006からの出土である。19は須恵器長頸壺の頸部で、20は砥石である。この砥石は、長方形をなしていたものが破損したもので、外面には鉄鋸の付着が認められる。

所見：畠跡6としてまとめたものには、南北方向を指向するグループと東西方向を指向するグループの2グループがある。これら2グループの切り合い関係をみると南北方向のものが東西方向のものより先行することがわかる。時期的には東西方向のグループには近世陶磁器が若干伴うことから、近世の所産と考えられ、南北方向のグループはそれ以前のものといえよう。なお、ピット列は方向性がU-044と共に通することからこれに伴う構列と考えられる。また、ピット列とU-044との間に小ピット2基もこれらの遺構に伴うものと考えられる。

畠跡7（第18図）

位置：12G-11-3～12G-11-5

構成遺構：U-061, 062, 063, 064, 076, 077, 078, M-009

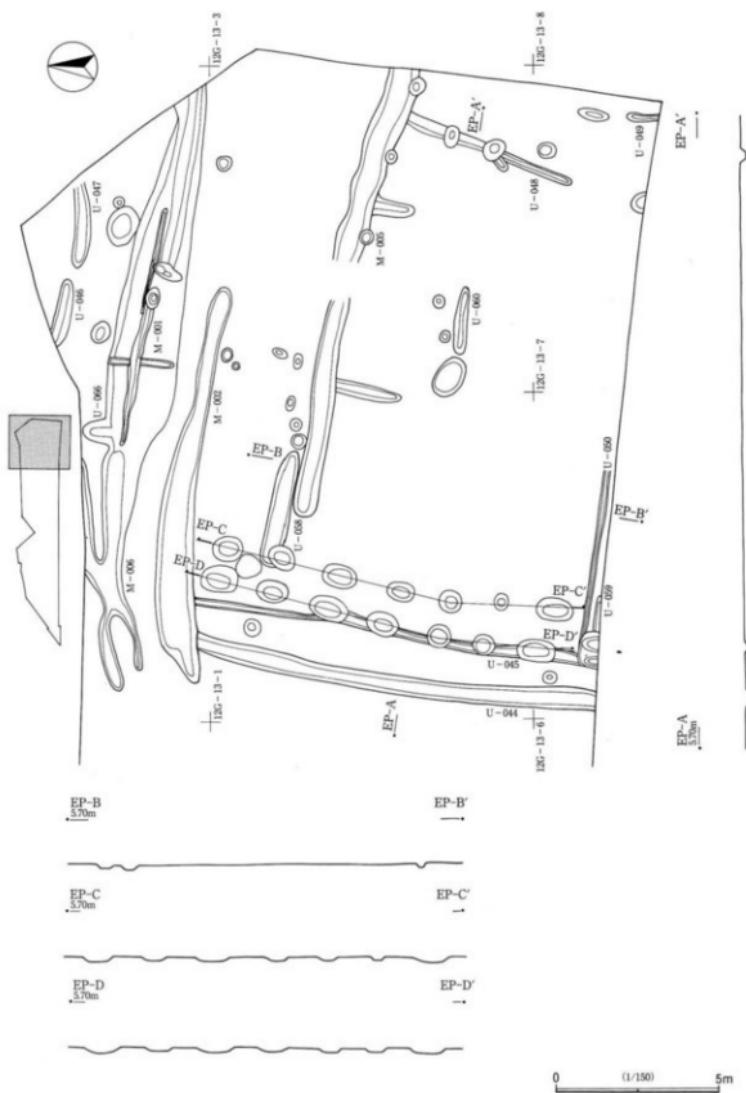
重複関係：なし

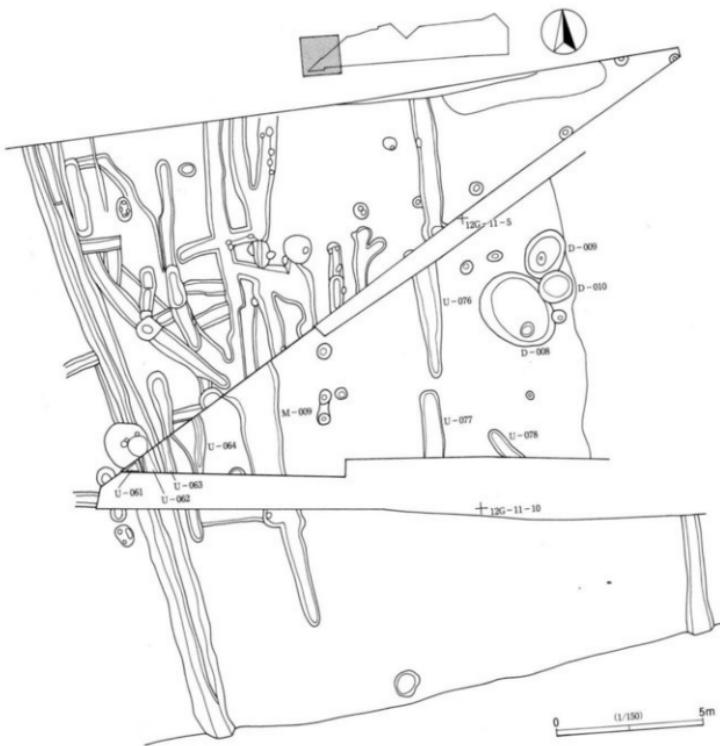
主軸方向：N-10°～15°-W

規模と平面形：長さ1.0m～3.7mを測る。

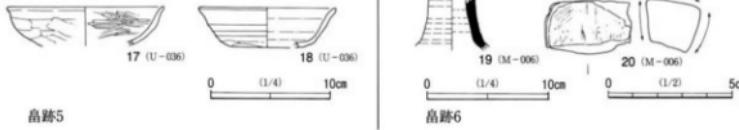
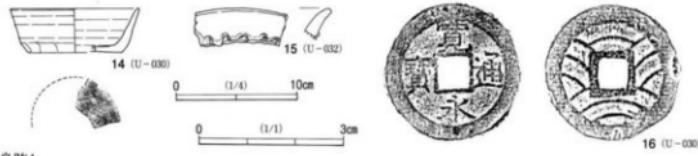
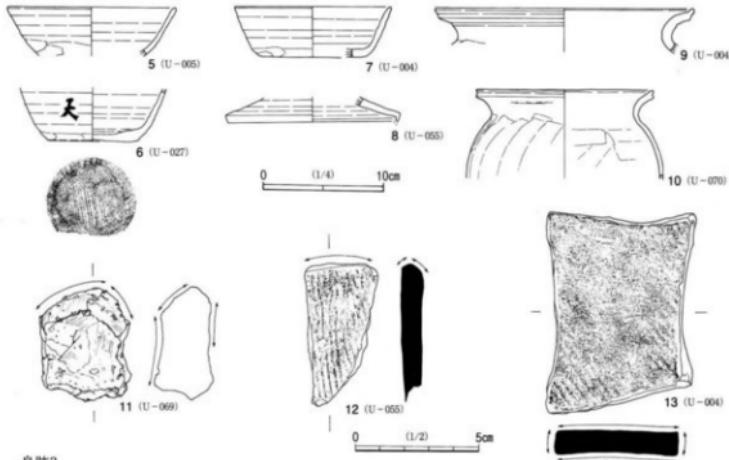
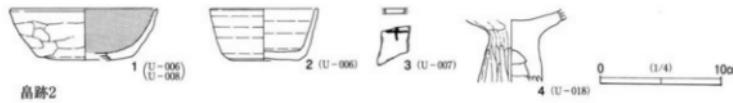
遺物：出土遺物は少なく、M-009から奈良・平安時代の土師器細片が若干出土したのみである。

所見：畠跡7のうちU-061と062については、東経文化財センター調査部分において中世溝16として報告されたものと同一のものであり、15世紀前半の年代観が与えられている。それ以外の遺構は奈良・平安時代の遺構として報告されたものと同一である。なお、後述のM-003とは方向性を共有しており、溝間の距離は約65mである。





第18図 岩跡7遺構実測図



第19図 高跡出土遺物実測図

3. 溝

溝は全部で10条検出された。このうちM-003を除く9条の溝については、畠跡に伴う畝状造構と方向性・間隔・規模・形態・新旧関係等が共通していることから畠跡の一部と考え、それぞれの畠跡の項目において記述をおこなった。このため本項では時期的にも異なるM-003のみについて記述する。

M-003（第20図、第1表）

位置：12G-2-25, 12G-12-5, 12G-12-10

重複関係：U-030, U-038, U-039, U-042, D-004よりも新しい

主軸方向：N-5°-W

規模と平面形：幅1.3~1.6m、長さ15.8mではば直線を呈している。深さは12~28cmで、底面は南から北に向かって傾斜している。

壁：穏やかに外傾して立ち上がり、断面はU字型を呈する。

覆土：黒色土が主体で、下部では海性砂が斑点状に混入する。自然堆積の様相を示している。

遺物：古墳時代・奈良・平安時代土師器、須恵器が主体をなすが、ごく僅かに中世陶器を含んでいる。

1は土師器壺で底部外面に「佛」の墨書が認められる。2は常滑窯の壺で、スタンプ文がみられる。

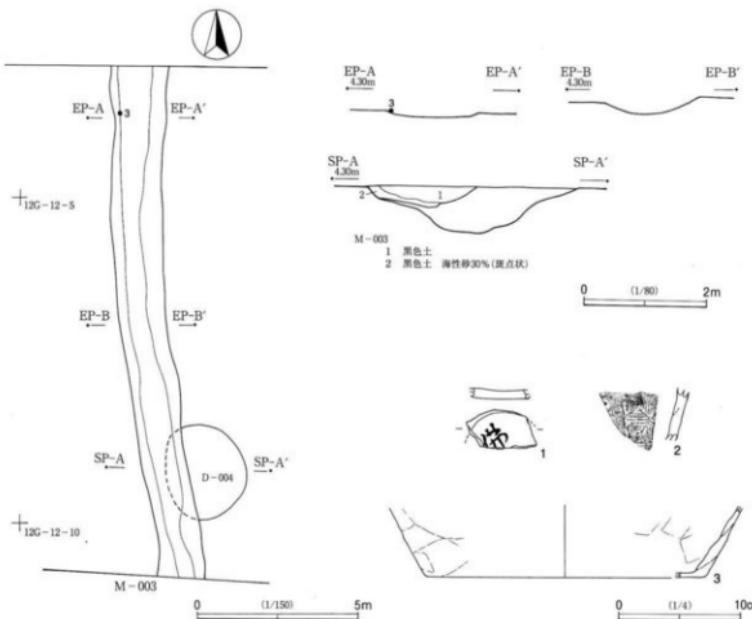
3は内耳鍋であろうか。胎土には白色砂粒子と雲母を多く含み、内面にはコゲが認められる。

所見：本跡は他の造構との切り合い関係や出土遺物の状況から、中世の所産と考えられる。なお、畠跡7で述べたU-061と062（東総中世溝16）とは方向性を共有している。

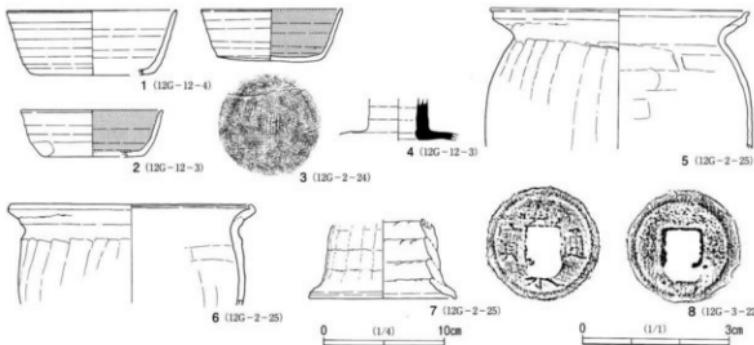
4. グリッド出土遺物

グリッドからは先述の縄文土器（第6図）のほか、古墳時代から近世に至るまでの様々な遺物が出土している。全体としては細片が多く、図示可能ものは8点であった（第21図、第1表）。

1から3はロクロ成形の土師器壺である。このうち2と3は内面が黒色処理されている。3はほぼ完形であることから、本来は何らかの造構に伴っていた可能性が高い。4は須恵器長頸壺で、肩が張った形態である。5と6は土師器壺であるが、使用に伴うススの付着などは確認できない。7は中空の土製支脚である。外面は被然により還元化している。また、内面には粘土積み上げ痕が明瞭に残っている。なお、今回の調査範囲では堅穴住居跡は検出されなかったが、財團法人東総文化財センター調査分において奈良・平安時代の住居跡が1軒検出されている。8は新寛永通宝である。形態・文字の特徴から元文期（1736~1741年）鑄造の山城横大路銭と考えられる。



第20図 M-003遺構・遺物実測図



第21図 グリッド出土遺物実測図

第3章 まとめ

今回の調査で検出された遺構・遺物は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の各時代のものであった。このうち縄文時代は遺物のみの出土であった。時期的には縄文時代後期前半の堀之内式から加曾利B式期に該当する。中島遺跡の過去2回の調査では、遺構としては後期初頭の称名寺式期の土坑が1基検出されたほか、中期加曾利E式から後期末葉の安行式期の土器が出土しているが、主体となっているのは称名寺式から加曾利B式のものである。周辺遺跡に目を転じると、栗山川を挟んで両岸に展開する芝崎遺跡や古川新田低地遺跡では、中期阿玉台式から晚期荒海式期まで幅広い時期のものが出土しているが、やはり主体となっているのは後期の堀之内式と加曾利B式のものである。また、中島遺跡と同様な砂丘帯上に立地する三反田遺跡や弥平野遺跡でも、三反田遺跡では堀之内1式を、弥平野遺跡では加曾利B式を中心とした遺物が出土している。

これら一連の遺跡における遺物出土傾向から、九十九里平野最奥部に形成された砂丘帯上に人々が積極的に進出したのは、縄文時代後期前半の段階になってからであったことが窺える。また、明確な遺構をほとんど残さず、出土する土器も粗製の深鉢が主体となっていることから、集落としての利用を考えるよりも漁労などの生産活動に力点を置いた遺跡であった可能性が高いものと判断されよう。近年、印西市西根遺跡など低地部での縄文時代遺跡の調査事例が増加しているが、それらの多くが中島遺跡と同様に縄文時代後期前半期に属しており、粗製深鉢土器が卓越する傾向や明確な遺構が認められない状況など共通点も多い。今後当該時期における低地部の土地利用、生産形態などの解明が期待される。

弥生・古墳時代の遺物は極めて少なく、弥生時代に関しては前回調査で有角石器が1点出土したのみである。また、古墳時代の遺物に関しても出土した土器類は著しく摩耗したものが多い。縄文時代後期に中島遺跡の土地利用が本格化しつつも、弥生・古墳時代には低調となった理由は何か。その理由の1つに生業形態の変化や周辺環境の変化などが考えられるが、芝崎遺跡等の周辺遺跡における変化をも視野に入れた考察が必要となろう。

本遺跡で最も遺構密度の濃くなる時期が奈良・平安時代である。今回の調査では、土坑10基、畠跡7か所(畝状遺構、溝等含む)が検出された。土坑では遺物を伴う3基について、ある程度の時期が推定できた。時代の古い順にD-005が8世紀後半～9世紀前半、D-004、006が9世紀後半と考えられる。これら3基の土坑については、平面形態が円形で断面形が漏斗状をなしていることから、井戸の可能性を指摘した。これまでの調査では、底面に井桁を設けた井戸が1基検出されているが、今回検出された土坑には井桁の痕跡は認められなかった。ただし、D-006のように底面が1段円形に掘り窪められたものもあり、曲物などを底面に設置していた可能性はある。つぎに土坑出土の遺物について見ると、D-005、006については出土位置が散在的であり、時期幅も広い傾向が認められる。このことからD-005、006の2基では埋没過程において不用となった土器類を投棄していった様子が復元できる。これに対してD-004の遺物出土状況は他とは異なり、底面付近からまとまって出土しており、一括した廃棄が想定される。また、出土した遺物に関しては「子山」「小川」「億」「公」などの墨書きが伴っており、一括廃棄の理由に祭祀的な意味合いが含まれていた可能性も指摘できる。なお、D-004、005の土師器壺には故意に口縁部や底部を打ち欠いたような痕跡の見られるものが多い。近年、打ち欠き痕を持つ土器について、祭祀に伴う遺物であるとの指摘がなされている。中島遺跡出土のこれら土器群がどのような意味を持つものであったのか、今後類似資料の増加による解

明が期待される。

このほかの検出遺構で注目されるのが、畠に関連する遺構である。多数検出された小規模な溝の性格については、堆積土が单一であること、溝の立ち上がりが急であることなどから畠に伴う耕作痕と考えるのが適当であろう。これら小規模溝は方向性や長さ、切り合い関係から7か所の畠跡に分別できた。このうち畠6と7については調査区が単独で狭くなった部分に相当するため一括とし、畠5は畠1～4に分別した調査区において、時期認定ができなかったものをまとめてある。このため同一時期の畠遺構と認識できるものは畠1～4の4遺構であった。この畠1～4については土坑との切り合い関係から、畠1が9世紀後半以前で畠2よりも古く、畠2が9世紀後半以前、畠3が9世紀後半以降、畠4が中世以前の所産と推定される。前回までの調査では、8世紀後半に畠が出現し、9世紀後半～10世紀前半においては遺跡西側で掘立柱建物群が、東側で畠が展開していた景観が明らかとなっている。今回の調査でもその傾向を追認することができた。なお、掘立柱建物群の性格については、周辺に堅穴住居がないこと、縄文陶器などの施釉陶器が多く出土したことなどから、一般集落に伴う掘立柱建物ではなく、官衙的な施設であった可能性が指摘されている。今回の調査では官衙であったことを推定する資料は得られなかった。また、畠として使用されていた区域と掘立柱建物群の区域とは交錯することがないことから、「中島」という周囲を低湿地に囲まれた狭い範囲において、自己完結的に同時存在していたものといえよう。

近年県内では、木更津市高部30号・32号墳墳丘下から検出された弥生時代後期末から古墳時代初頭のものを最古として、畠跡の検出事例が増加しつつある。しかしながら、中島遺跡や近接する芝崎遺跡のように広範囲に展開する畠跡を検出した事例は存在しない。芝崎遺跡では、8世紀初頭から堅穴住居周辺部で畠を開拓し始め、8世紀後半から10世紀前半にかけて耕地面積を拡大し、11世紀前半には終息を迎えるという変遷を示している。この変遷過程は、先に述べた中島遺跡と共通するものである。また、芝崎遺跡での畠状遺構の方向性は、それぞれ一定の区画を意識して作られており、条理的な土地区画の影響も指摘される。このような畠跡の出現は、ただちに畑作に依存した生産形態を復元することは危険であるものの、何らかの行政的施策を反映しているものと考えるのが自然であろう。とは言え、中島遺跡、芝崎遺跡における砂丘帯という限られた可耕地に対する住居域と畠域との空間利用のあり方を考えると、やはりこれら畠跡は大規模畑作農業を想定するよりも、集落各戸に付属した畠であったと考えた方が良いように思われる。

中世の中島遺跡では西側に周囲に溝を巡らした居館があり、東側では南北方向の溝が62～65m間隔で検出されている。今回検出されたM-003についても方向性や規模が共通しており、砂丘帯を区切る区画溝であった可能性が高い。

(参考文献)

- 道澤 明 2005 「芝崎遺跡Ⅰ」 財團法人東経文化財センター
道澤 明ほか 2006 「芝崎遺跡群」 財團法人東経文化財センター
石渡典子ほか 2007 「四ツ塚遺跡・中島遺跡」 財團法人山武郡市文化財センター
稻見英輔・吉田直哉 2005 「遠山並塚遺跡 遠山上橋遺跡 遠山谷ノ下遺跡 古川新田低地遺跡」
財團法人山武郡市文化財センター
糸川道行ほか 2004 「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書X VI-印西市船尾白幡遺跡-」
財團法人千葉県文化財センター
糸川道行 2005 「古代土器の打ち欠き・穿孔」『研究紀要24』 財團法人千葉県文化財センター
小林信一ほか 2005 「西根遺跡」 財團法人千葉県文化財センター
佐藤甲二 2000 「畠跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題」『はたけの考古学』日本考古学協会
西原崇浩 2002 『高部古墳群Ⅰ』 木更津市教育委員会

第1表 遺物観察表 () は復元値 < > は残存値

D-004

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	灰陶器	長頸瓶	20	—	(11.6)	—	白色粒子 黑色粒子 雲母	灰オリーブ 灰褐色		外灰釉 外灰釉		
2	灰陶器	長頸瓶	20	—	(11.3)	—	白色粒子 黑色粒子 雲母	灰褐色		外底墨痕、内底墨書 「子山」		
3	土師器	壺	60	11.6	42	6.8	白色粒子 黑色粒子 雲母	にぶい赤褐色		底部打ち欠き	内外墨書「子山」	
4	ロクロ土師器	壺	90	14.4	42	6.1	白色粒子 赤色粒子 骨針	にぶい橙褐色	回転糸切り→ ヘラケズリ	口縁打ち欠き	外底墨書「小川」 「健」	
5	ロクロ土師器	壺	95	12.4	41	6.0	白色粒子 赤色粒子 骨針	にぶい橙褐色	回転糸切り→ ヘラケズリ	口縁打ち欠き	内外墨書「小川」 「健」	
6	ロクロ土師器	壺	20	—	(1.7)	6.0	白色粒子 赤色粒子 雲母 黑色粒子 骨針	にぶい黄褐色	回転糸切り→ ヘラケズリ	口縁打ち欠き	内外墨書「団」	
7	ロクロ土師器	高台付壺	20	—	(2.1)	7.2	白色粒子 黑色粒子 石英	にぶい黄褐色	貼付高台	内黒	外底墨書「子山」	
8	ロクロ土師器	壺	5	(12.0)	3.8	(6.0)	白色粒子 赤色粒子 骨針	にぶい橙色				
9	ロクロ土師器	壺	25	(13.8)	3.7	(8.0)	白色粒子 赤色粒子 骨針 石英?	灰黃褐色	ヘラケズリ	内黒	外・口縁剥落	
10	土師器	壺	20	(13.1)	4.7	(5.8)	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい赤褐色				
11	灰陶器	壺	5	(26.0)	(3.4)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	灰褐色	ヘラケズリ	内黒		
12	土師器	壺	5	(17.2)	(6.2)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母?	にぶい褐色				

D-005

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	土師器	壺	25	(12.4)	(3.0)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい赤褐色				
2	ロクロ土師器	壺	90	11.4	3.6	6.8	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色	ヘラケズリ	口縁打ち欠き		
3	ロクロ土師器	壺	30	(11.4)	(3.4)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色				
4	ロクロ土師器	壺	80	12.4	4.3	7.0	白色粒子 赤色粒子 雲母	灰黃褐色	回転糸切り→ ヘラケズリ	口縁打ち欠き		
5	ロクロ土師器	壺	70	11.2	7.0	4.6	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色	静止糸切り→ ヘラケズリ	口縁打ち欠き	外底墨書「萬片口」、 縦刻「×」	
6	ロクロ土師器	壺	10	(13.2)	(2.9)	—	白色粒子 黑色粒子 雲母	にぶい黄褐色	ヘラケズリ	口縁打ち欠き		
7	ロクロ土師器	壺	10	(11.0)	(2.7)	—	白色粒子 黑色粒子 雲母	にぶい黄褐色				
8	ロクロ土師器	壺	15	(11.8)	4.0	(8.2)	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色	ヘラケズリ	—		
9	ロクロ土師器	壺	5	(9.8)	(3.7)	—	白色粒子 赤色粒子 骨針	灰黃褐色				
10	ロクロ土師器	壺	10	(11.6)	(3.3)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色			外底墨書「中」	
11	ロクロ土師器	高台付壺	95	10.0	4.6	6.8	白色粒子 黑色粒子 雲母	にぶい赤褐色	貼付高台	口縁打ち欠き		
12	土師器	壺	5	—	—	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい褐色			外底墨書「天」	
13	ロクロ土師器	壺	25	—	(2.5)	(8.0)	白色粒子 黑色粒子 雲母	褐色	ヘラケズリ	内黒		
14	ロクロ土師器	高台付壺	10	—	(2.4)	(8.0)	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい橙色	貼付高台	内黒		
15	土師器	壺	5	(16.0)	(3.2)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい赤褐色			外口縁スス	
16	土師器	壺	10	(14.6)	(4.4)	—	白色粒子 赤色粒子 雲母	赤褐色				
17	土師器	壺	10	(14.2)	(5.6)	—	白色粒子 骨針 雲母?	にぶい赤褐色			内口縁スス	
18	土師器	壺	30	(17.4)	(8.6)	—	白色粒子 骨針 雲母?	赤褐色				
19	土師器	壺	10	—	(9.7)	(9.4)	白色粒子 赤色粒子 雲母?	灰褐色	ヘラケズリ			

D-006

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	灰陶器	長頸瓶	40	—	(8.0)	—	白色粒子	灰褐色		外灰釉		
2	ロクロ土師器	壺	20	(14.6)	(3.4)	—	白色粒子	灰褐色		内外黒		
3	ロクロ土師器	壺	15	(13.0)	(3.1)	—	白色粒子 赤色粒子 黒色粒子	にぶい橙色				
4	ロクロ土師器	壺	30	—	(2.2)	(6.4)	雲母 赤色粒子 雲母?	にぶい黄褐色	回転糸切り	内黒	内外スス	
5	ロクロ土師器	高台付壺	30	—	(2.3)	7.4	白色粒子 赤色粒子 雲母?	灰黃褐色	回転糸切り 貼付高台			
6	黒窓器	壺	5	—	—	—	白色粒子	灰褐色				
7	土師器	壺	5	—	(3.2)	—	白色粒子 黑色粒子 石英	にぶい黄褐色		外赤	破断面磨滅	
8	土師器	輪錐車	50	外径 57	輪径 12	厚 12	白色粒子	にぶい黄褐色		—	輪部摩耗	
9	輕石	—	130g	長径 51	短径 42	厚 33	—	—	—	—	前面摩耗	

高跡

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	土師器	环	50	119	42	7.7	白色粒子 雲母	灰褐色	ヘラケズリ	内黒	底部打ち欠き	
2	ロクロ土師器	环	70	(8.8)	42	6.0	白色粒子 黑色粒子 雲母	にぶい褐色	ヘラケズリ			外底墨書「□」
3	ロクロ土師器	环	5	—	—	—	黑色粒子 赤色粒子	にぶい褐色	回転糸切り			
4	土師器	高环	30	—	(6.0)	—	白色粒子	にぶい褐色			破断面削減	
5	ロクロ土師器	环	20	(13.6)	(4.0)	—	白色粒子 雲母	にぶい褐色			内面スス	
6	ロクロ土師器	环	60	—	(4.4)	(7.4)	白色粒子 雷母	灰黃褐色	静止糸切り→			外底墨書「天」
7	ロクロ土師器	环	10	(12.8)	4.1	(8.6)	白色粒子 黑色粒子	にぶい褐色	ヘラケズリ			
8	ロクロ土師器	蓋	10	(7.0)	(2.0)	—	白色粒子 雲母	にぶい褐色				
9	土師器	蓋	5	(21.0)	(3.6)	—	赤色粒子 雲母	にぶい褐色				
10	土師器	蓋	25	(14.4)	(7.3)	—	白色粒子 雲母	にぶい褐色				
11	輕石	—	13.2g	長径 47	短径 3.7	厚 2.6	—	—	—	—	個面摩耗	
12	転用硯石	須恵器裏	—	長径 5.7	短径 3.0	厚 0.9	白色粒子 骨針	灰褐色	—		破断面摩耗	
13	転用硯石	須恵器裏	—	長径 8.3	短径 6.1	厚 1.2	白色粒子	灰褐色	—		破断面摩耗	
14	ロクロ土師器	环	20	(10.4)	3.6	(7.8)	白色粒子	にぶい褐色	回転糸切り→	ヘラケズリ		
15	土師器	蓋	5	—	—	—	白色粒子 赤色粒子	にぶい褐色				
16	錢貨	寛永通宝	100	外径 28	内蔵 0.6	厚 1.0	—	—	—	—	明和六年鑄 当四銭	
17	土師器	环	15	(12.7)	(3.2)	—	白色粒子	灰褐色				
18	ロクロ土師器	环	20	(11.2)	3.2	(6.0)	白色粒子 骨針	にぶい小褐色	ヘラケズリ			
19	須恵器	長縫口	5	—	(5.0)	—	白色粒子	灰白色		内灰釉		
20	硯石	—	22.1g	長径 3.6	短径 2.2	厚 2.2	—	—	—	—	外表面調	

M-003

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	ロクロ土師器	环	5	—	—	(7.4)	白色粒子 赤色粒子	にぶい褐色	ヘラケズリ			外底墨書「佛」
2	常滑	蓋	1	—	—	—	白色粒子	灰オリーブ色		外灰釉		
3	陶器	内耳鉢	5	—	(5.0)	(22.8)	白色粒子 雲母	褐色	ヘラケズリ		内面スス	

グリッド

番号	種類	器種	遺存度 %	口径	器高	底径	胎 土	外面色調	底部調整	赤影等	使用状況	備 考
1	ロクロ土師器	环	15	(13.8)	52	(10.2)	黑色粒子 白色粒子	にぶい褐色	ヘラケズリ			内面スス
2	ロクロ土師器	环	5	(11.6)	38	(8.2)	白色粒子	灰褐色	ヘラケズリ		内黒	
3	ロクロ土師器	环	99	11.4	4.5	8.4	白色粒子 赤色粒子 雲母	にぶい褐色	静止糸切り→	ヘラケズリ	内黒	—
4	須恵器	長縫口	10	—	(3.4)	—	白色粒子	灰色				
5	土師器	蓋	25	(20.8)	(11.3)	—	白色粒子	にぶい褐色				
6	土師器	蓋	10	(19.8)	(6.3)	—	白色粒子 骨針 黑色粒子 赤色粒子	明赤褐色				
7	土製品	支脚	20	(12.6)	(7.0)	—	白色粒子	褐色			外表面元化	
8	錢貨	寛永通宝	90	外径 24	内蔵 0.7	厚 0.5	—	—	—	—	元文期 山城廻大路 銀	

第2表 島跡新旧関係表

島跡1

旧	島跡1	新
	U-017	
U-023	U-020, 022, 026	
U-054	U-055	
U-056	U-052, 057, 068, 069, 070	
U-065	U-057, 074	

旧	島跡1	新
	U-067	U-068, 069, 070
U-072	U-055, 071	
U-073		
M-010	U-055, 057	

島跡2

旧	島跡2	新
	U-001	
U-006	U-012, 024, D-003	
U-007	U-012	
U-008	U-012	
U-009	U-005	
U-011	U-003	
U-013	U-024	
U-015	U-004	
U-018	U-024	
U-021	U-019	
U-023	U-022	U-027
	U-025	
	U-028	

旧	島跡2	新
	U-029	
U-031	U-032	
U-034	U-032, 036	
U-037	U-032	
U-039	D-004, M-003	
U-040	M-004	
U-041		
U-042	M-003, 004	
U-043		
U-056	U-051	
U-065	U-074	
	U-075	

島跡3

旧	島跡3	新
U-011	U-003	
U-015	U-004	U-024, 030, 032, 033
U-009	U-005	U-012, 024, D-003
	U-010	U-012
U-021	U-019	
U-023	U-020	
U-023	U-026	
U-022	U-027	
U-052, D-005, 007	U-051	

旧	島跡3	新
	U-053	
M-008, 010, U-054, 072	U-055	
M-010, U-056, 065, D-006	U-057	
U-056, 067	U-068	
U-056, 067	U-069	
U-056, 067, 073	U-070	
U-072	U-071	
D-007	U-079, -	

島跡4

旧	島跡4	新
U-005, 006, 007, 008, 010	U-012	U-014
U-004, 005, 006, 013, 018	U-024	
U-004	U-030	M-003, 004
U-004, 031, 034, 037	U-032	

旧	島跡4	新
U-004	U-033	
	U-035	
	U-038	M-003

島跡5

旧	島跡5	新
U-016	U-002	
U-012	U-014	
	U-016	U-002
U-034	U-036	

旧	島跡5	新
U-030, 040, 042	M-004	
	M-007	
	M-008	U-055

島跡6

旧	島跡6	新
	U-044	M-002
U-045	M-002	
U-046		
U-047		
U-048	M-005	
U-049		
U-050		
U-058		

旧	島跡6	新
	U-059	
U-060		
U-066	M-006	
M-001		
U-044, 045	M-002	
U-048	M-005	
U-066	M-006	

写 真 図 版

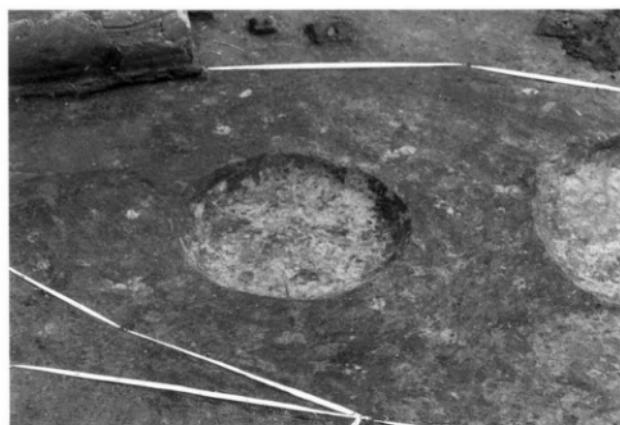


中馬道跡周辺空中写真(1984年撮影)

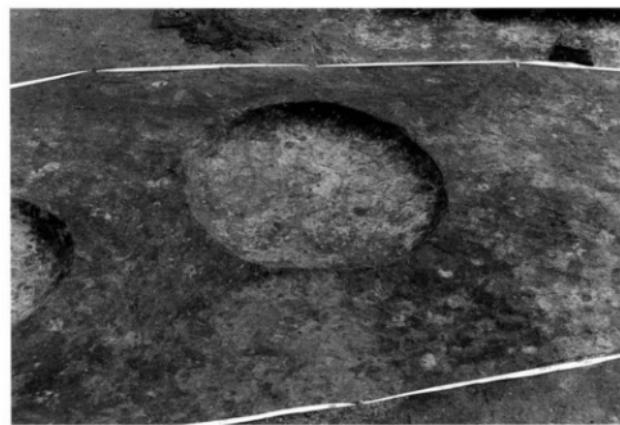
図版2



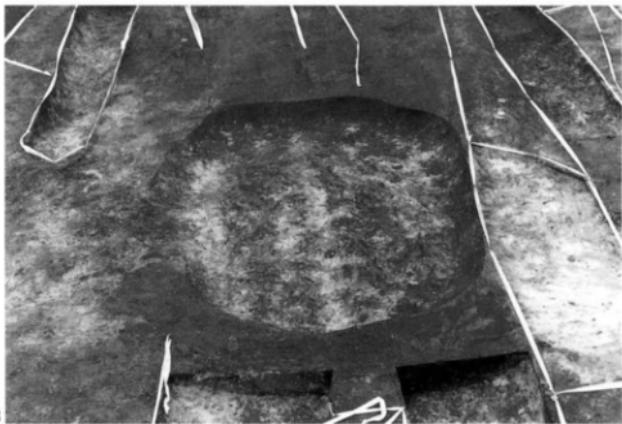
空撮（東側）



D - 001



D - 002

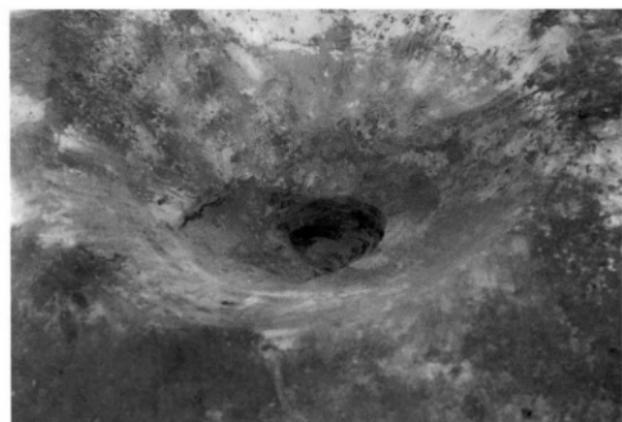




D - 005



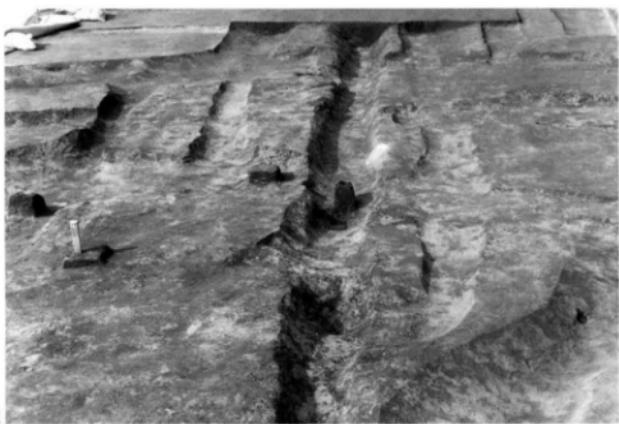
D - 005遺物出土状況



D - 006



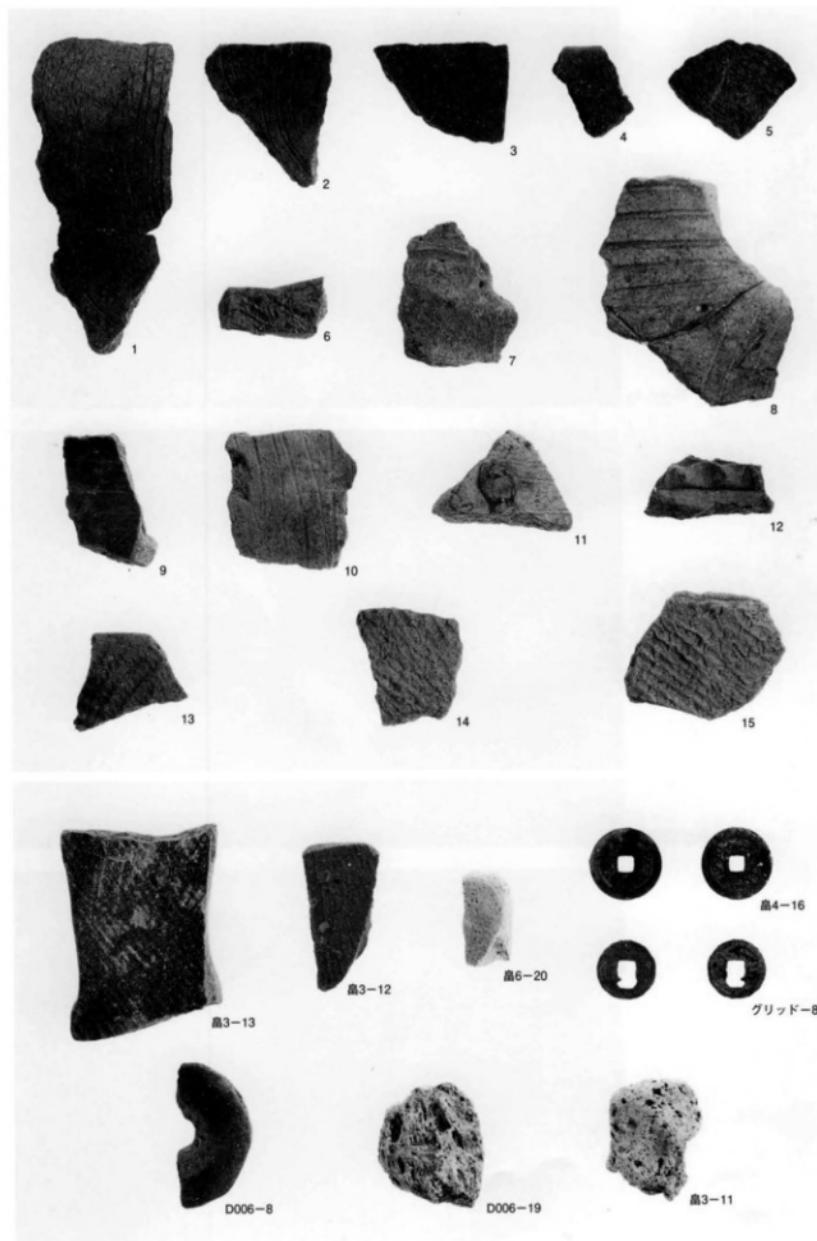
ピット列

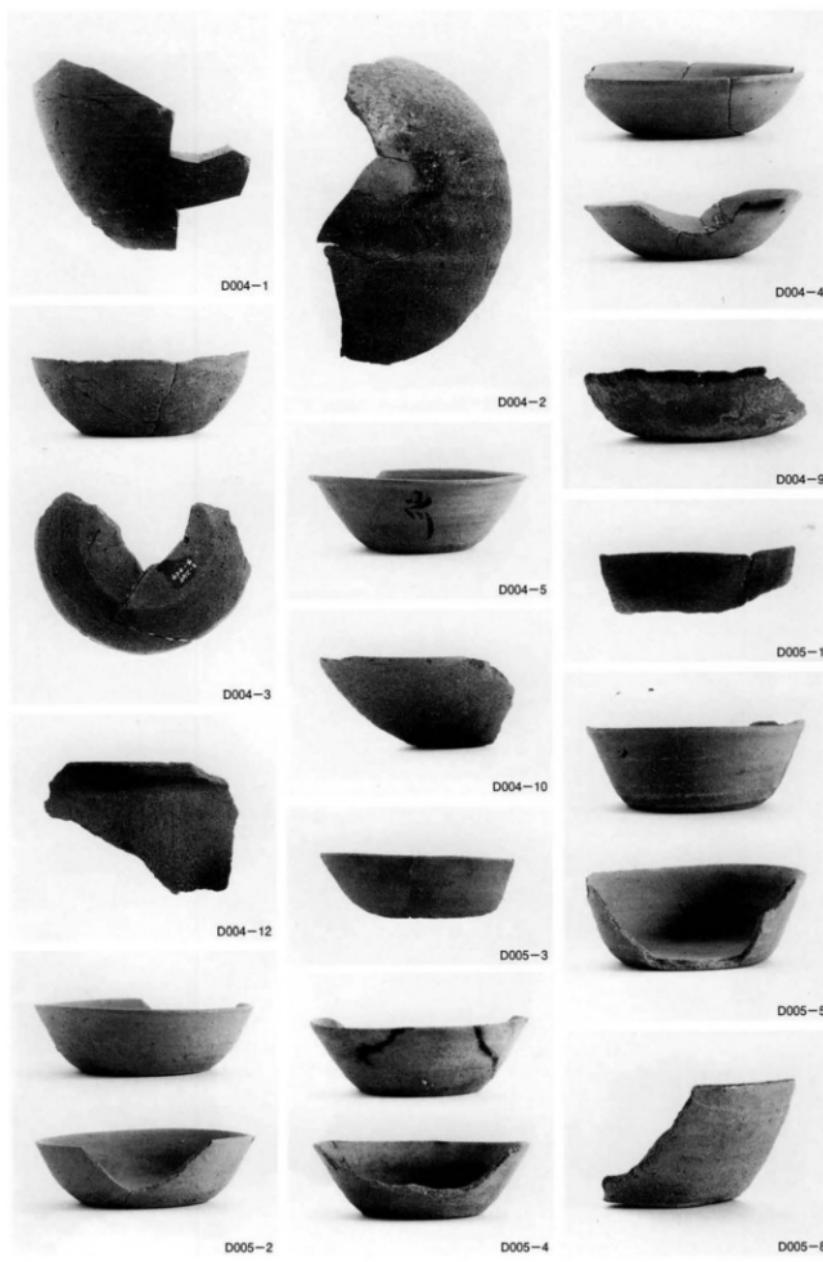


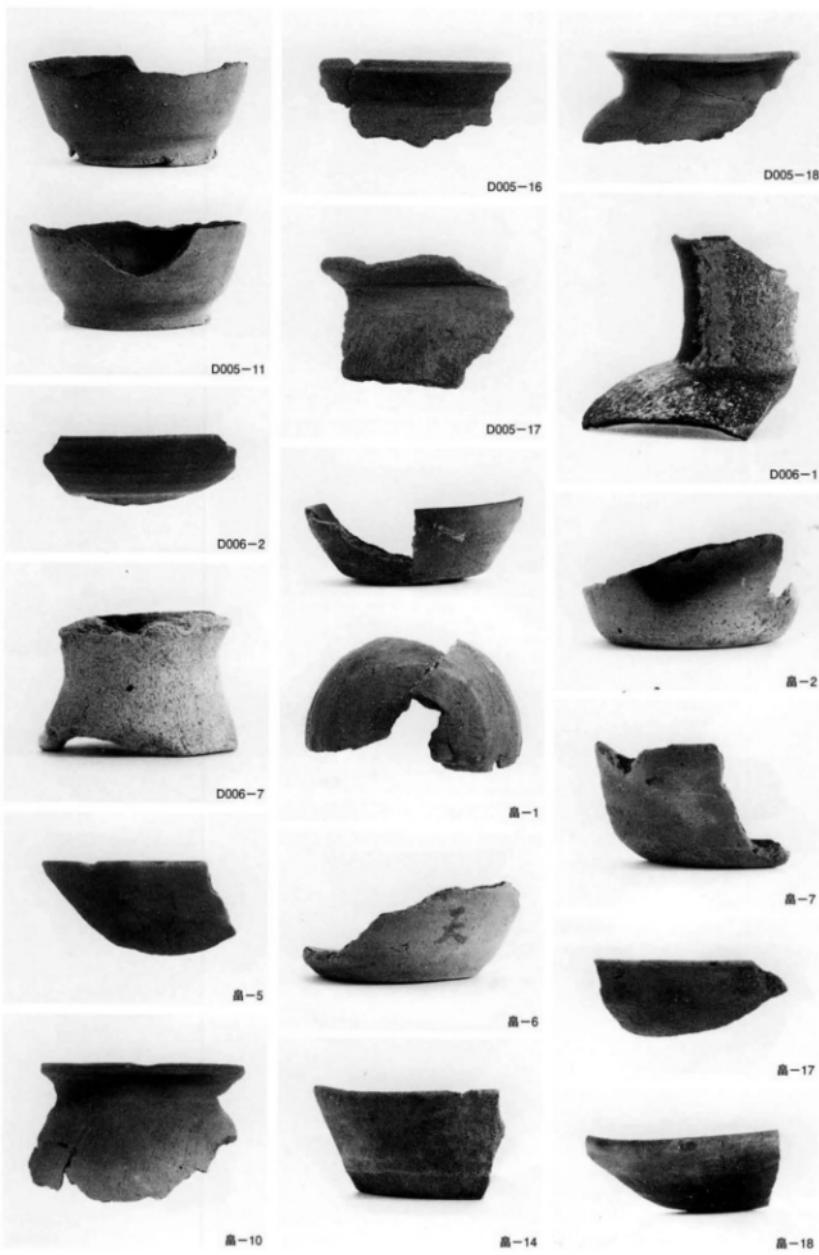
U-024・030・032周辺

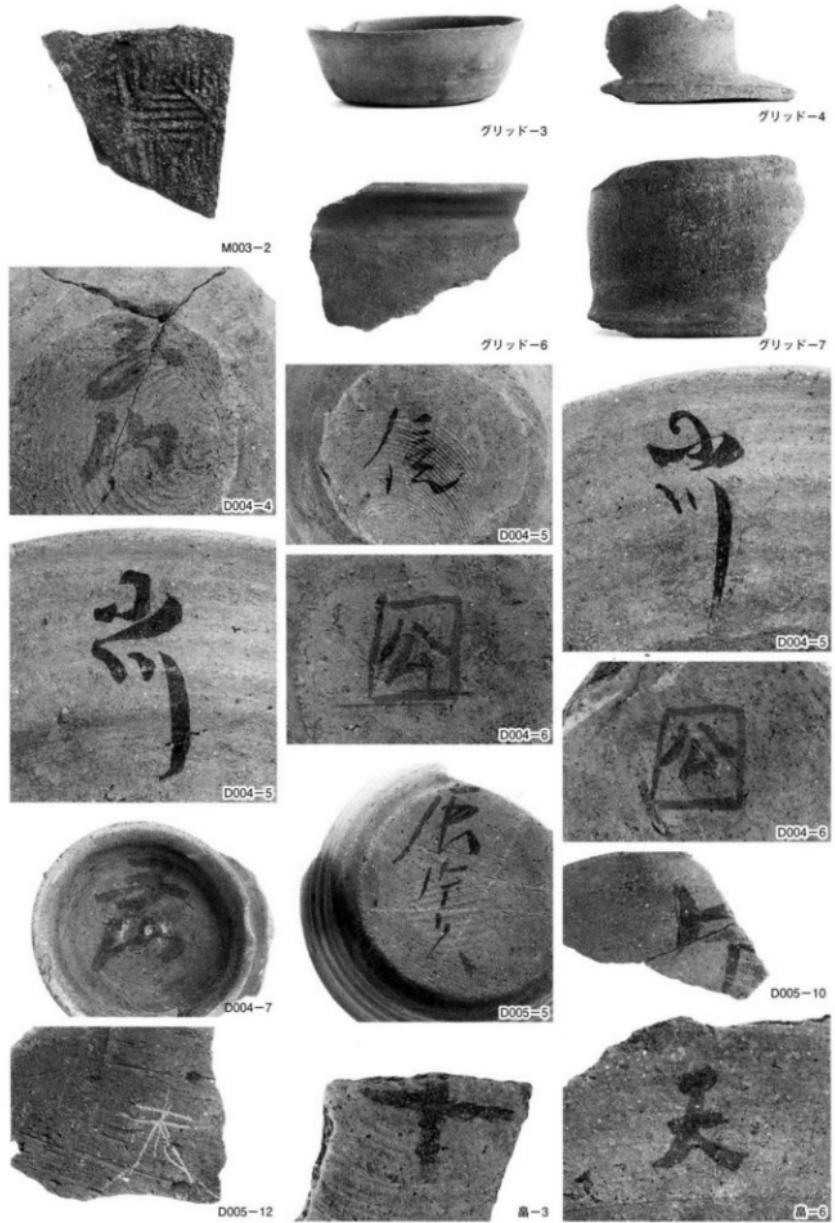


U-057・069・070周辺









報告書抄録

ふりがな	なかじま いせき (1952-2ちてん)
書名	中島遺跡 (1952-2地点)
副書名	IC周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人山武都市文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第103集
編著者名	大谷弘幸
編集機関	財団法人山武都市文化財センター
所在地	〒299-3242 千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2 Tel0475-72-3211
発行年月日	西暦2008年3月25日

所取遺跡名	所在在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中島遺跡 (1952-2地点)	千葉県山武郡横芝光 町芝崎字中島1952- 2他	12410	山文セ-249	35° 40° 7'	140° 30° 7'	20061010~ 20061214	本調査 上層 1,416m ²	IC周辺整備事業

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中島遺跡 (1952-2地点)	生産遺跡	縄文時代 奈良・平安時代	畠跡 7か所 土坑 10基 溝 10条	縄文土器 土師器・須恵器・石製品	広範囲に展開する古代の畠跡を検出した。

要約	中島遺跡は、九十九里平野最奥部、栗山川左岸の砂带上に立地している。標高は約45mである。調査では8世紀後半~9世紀後半にかけての井戸と思われる土坑を検出したほか、これら土坑と前後する時期の畠跡を7か所検出した。遺物では砂帯形成時期を知る上で貴重な縄文後期の土器や土坑に伴う「子山」などの墨書き土器が多数出土したことが注目される。なお、本遺跡は今回を含め3回におよぶ発掘調査が実施され、遺跡の8割近くを調査したこととなり、低地遺跡の貴重な資料と言える。
----	---

中島遺跡(1952-2地点)

—IC周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印 刷 平成20年3月19日

発 行 平成20年3月25日

編 集 財団法人 山武都市文化財センター
千葉県山武郡白井町金谷郷1356-2

発 行 横 芝 光 町

財団法人 山武都市文化財センター

印刷・製本 株式会社 正 文 社
千葉県千葉市中央区都町1-10-6
TEL 043-233-2235
